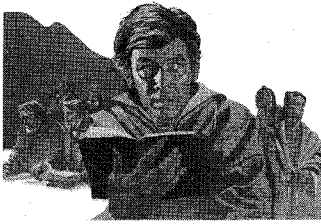


聖徒の道

11 1981





末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スベンサー・W・キンボール
 N・エルドン・タナー
 マリオン・G・ロムニー
 ゴードン・B・ヘンクレー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
 マーク・E・ピーターセン
 リグランド・リチャーズ
 ハワード・W・ハンター
 トーマス・S・モンソン
 ボイド・K・バッカー
 マービン・J・アシュトン
 ブルース・R・マッコンキー
 L・トム・ベリー
 デビッド・B・ヘイト
 ジェームズ・E・ファウスト
 ニール・A・マックスウェル

顧問

M・ラッセル・バラード
 ローレン・C・ダン
 レックス・D・ビネガー
 チャールズ・A・ディディエ
 ジョージ・P・リー
 F・エンツィオ・ブッシュ

編集長

M・ラッセル・バラード

国際機関誌

編集主幹：
 ラリー・A・ヒラー
 編集副主幹：
 デビッド・ミッチェル
 子供の頁編集：
 ボニー・ソーンダース
 デザイナー：
 ロジャー・ギリング
 制作：
 ノーマン・ブライス

も く じ

| | | |
|-------------------|---------------------------|----|
| この世の救いの原則…………… | マリオン・G・ロムニー…………… | 1 |
| 最後の努力をしていますか…………… | バル・R・クリスチャンセン…………… | 9 |
| クエンカ兄弟の信仰…………… | フレッド・R・グラデン・ジュニア…………… | 15 |
| 私があなたを遣わした…………… | キャサリン・スコット…………… | 17 |
| 聖徒たちの集う礼拝堂を…………… | ロナルド・C・パーカー…………… | 18 |
| 犠牲を通してもたらされる…………… | カーマ・T・プリート、ロイ・A・プリート…………… | 20 |
| 成長と発展 | | |
| あるイギリス海軍兵の冒険…………… | ウィリアム・G・ハートリー…………… | 23 |
| ミリアン…………… | ライネ・T・デリック…………… | 30 |
| バスに乗って…………… | オービッド・ゾリンガー…………… | 33 |
| 夜明け…………… | ローレン・C・ダン…………… | 36 |
| かさ男…………… | フランシス・オールドマン…………… | 38 |
| 穴ぐらの中で…………… | アイリス・シンダーガード…………… | 40 |
| ジョセフ・F・スミス…………… | ハワード・ボナー…………… | 43 |
| ローカル・ニュース…………… | | 45 |

聖徒の道 11月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
 東京都港区南麻布5-10-30
 印刷所 株式会社 精興社
 配 送 東京ディストリビューション・センター
 東京都世田谷区上用賀4-9-19
 定 価 年間予約2,200円
 海外予約2,200円

INTERNATIONAL MAGAZINE PBMA 0631 JA Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京0-41512
 口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会
 東京ディストリビューション・センター

この世の救いの原則

第二副管長

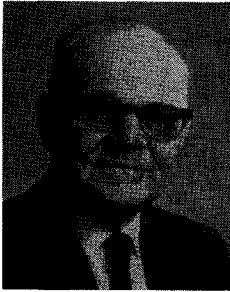
マリオン・G・ロムニー

今日、私たちは広範囲にわたる深刻な経済および社会状態に直面しています。しかしこのような経済的圧迫さらには剝奪にさえも直面しなければならない時代は、教会員にとって目新しいことではありません。教会歴史の中で、聖徒たちは一度ならずたびたびそのような試練に立ち向かってきました。その結果、主は教会の初期の時代からずっと、指導者が一定の正しい原則をはっきり理解できるように、導いてきて下さっています。この世の救いに関するそれらの基本原則を、ここで再確認する必要があるようです。

今世紀の初め、ジョセフ・F・スミス大管長はこの世の救いの重要性と霊的な救いとの関係をこのように説明しています。「あなた方は、物質的なものと霊的なものが溶け合っていることを、いつも心に留めなければならない。このふたつは分離したもの

ではない。私たちが地上にいる限り、片方なしでもう一方のを行なうことはできない……末日聖徒は、霊的な救いだけでなく、この世の救いをもたらす福音を信じている。私たちは、牛や……菜園や農場……そのほか私たち自身と地上の家族を養うために必要なものを備えなければならない……私たちはまず善良、忠実、また正直で勤勉な人にならなければ、本当に良い、信仰深いキリスト教徒にはなれないと思っている。それで私たちは、勤勉、儉約、謹厳を説く福音を宣伝している。」「(「福音の教義」、ソルトレーク・シティ、デゼルトブック、1939年、第10章p.201)

この世の救いの最も根本的な原則は、ふたつの基本概念から成っています。すなわち個人の扶養(個人の自立)と家族の扶養(家族としての自立)です。この最初の原則である個人の自立は、教会の基本的な教



この世の救いの最も根本的な原則は、ふたつの基本概念から成っています。すなわち個人の扶養……と家族の扶養です。

義である自由意志からきています。自由意志の教義は、人間の本質は霊的な物質すなわち英智から成っているという真理に基づいています。この英智は、聖典の中にこのように記されています。「……神の置きたまいし範囲に於て独立し、独りにて働くなり……見よ、ここに人の自由意志あり。……」(教義と聖約93：30—31参照)

この永遠の状態の結果として、エロヒムは、人間を創造し、この地上に置くに当たって、人間に自らの思い通りに行動する自由意志を与えられました。この自由意志は生活のあらゆる面にあてはまるものですが、物質的な事柄に関して、主は特に念入りに指示しておられます。「そは、わが生くる者の為に造りて備えたるこの世の幸福を掌ど

る者として、すべての人をしてその責に任せしむるは主なるわれ必要とするところなればなり……地は物に満ち足りて余りあり。然り、われよろずの物を備えて人の子らにこれを与え、人各々を自由意志によりて動く者となす。」(教義と聖約104:13, 17)

このように、私たちが選択しさえすれば物質的にも霊的にも「自分の救いを達成」し、この第二の位で約束されている祝福にあずかれるよう、すべてが整えられていることがわかります。教会で言われる自立というのは、英智や自由意志といった教義と関連のある永遠の真理からきています。とすると当然ながら、自立ということは多くの予言者が教えているように、福音の計画の基本的な真理ということになります。

自立というのは、技術や才能面での個人的な成長を意味し、自分自身の必要や欲求を満たすためにそれらを応用することです。さらに、自己訓練によってそれらの技術を修得し、自制心と慈悲の心をもって自分自身と他の人々を祝福するためにそれらの技術を使うことです。主がこの第二の位で、身も心も健全なすべての御自分の子供たちに、それらを達成するよう望んでおられるということは、労働すなわち生活を支えるために熱心に働くことを説いた多くの聖句の中で明らかにされています。

例をあげてみましょう。初めに、主は働くことを生活を支えていくための手段として定められました。主はアダムにこのように言っておられます。「あなたは顔に汗して

パンを食べ、ついに土に帰る。(創世3:19)
イスラエルに対しては言葉を変えてこのように言われています。

「六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。」(出エジプト20:9)

この最後の神権時代に、主は再びこのことについて明確に語っておられます。「汝、怠惰なることなかれ。およそ怠惰なる者は働く者のパンを食することもなく、またその衣服も着るべからざればなり。」(教義と聖約42:42) またこうも言われました。「怠惰なる者は悔い改めて行いを改むるにあらざれば、教会の中にて地位を与えらるることなし。」(教義と聖約75:29)

これらの聖句から考えると、どの会員も自己を扶養するという責任を勝手に他人に転嫁してはならないはずで、むしろ、各人が働くことを通して個人の業績に大いに満足を見いだせるよう努力する必要があります。そうする時に、人は物質的にも霊的にも労働の結ぶ実を手にすることができるのです。さらに、よく承知していることですが、自立ということには少なくとももうひとつの意味があります。それは個人の責任ということです。アビナダイは、霊的な事柄に関して、私たちは皆「その身でなした行いの善悪に応じて裁判を受けるために神の法廷に召される」(モーサヤ16:10)と教えています。

人はそれぞれ、霊的な事柄に関する選択や行ないに対して責任があるように、物質的な事柄に関しても責任があります。私た

ちがもしふだんから質素儉約を心掛け、緊急時のために貯蓄していれば、もっと簡単に経済的な問題を切り抜けることができます。もし収入以上の出費をしていれば、請求書が来た時に、当然自分のとった行動の結果として支払いをしなければなりません。またもし私たちが自分の選んだ職場で、知識や技術にみがきををかけていくなれば、チャンスが来た時に昇進や昇給を期待することもできます。このように、私たちがこの世で自立していくには、自分自身で努力し決断していかなければならないのです。主は私たちを陰になり日向になりて強めて下さいますが、私たちが自分で足を踏み出して初めて主はその歩みを導いて下さるのです。結局、私たち自身の行動が祝福の有無を決めるというわけです。これは、自由意志や責任に伴う直接的な結果です。私たちは自分のとる行動に対して責任がありますが、その行動の結果に対しても責任を負わなければなりません。自分のとった行動の影響が必ずしも直接目に見えて現われるわけではありませんが、それらは確かに収穫の律法なるものに支配されているのです。

「人は自分のまいたものを、刈り取ることになる。」(ガラテヤ6:7参照)

では次に、この世の救いの2番目の基本原則、家族の自立について述べてみましょう。

教会では、家族を扶養し家族一人一人が互いに力となって助け合い、進歩すること(すなわち家族の自立)が、個人の

自立の基礎となっています。家族は、教会の根本となる組織単位です。いかなる機関や施設もこれにとって代わることはできませんし、代わるべきものでもありません。神聖な誓約と永遠の神権政体によって、永遠の家族単位が確立されています。その誓約の一部としてなされた約束のゆえに、夫は自分の家族を養うという責任を負っています。主はこのように言われました。「妻たる者は夫の死に至るまで夫に扶養を要求する権利あり……すべて子女たる者は丁年に達するまで養育の義務を両親に要求する権利を有す。」(教義と聖約83：2，4)

使徒パウロはこのように述べています。「もしある人が、その親族を、ことに自分の家族をかえりみない場合には、その信仰を捨てたことになるのであって、不信者以上にわるい。」(1テモテ5：8)

本人の次に、世を去るまで愛をもって個人を助け支えるという責任、祝福、機会を受けるのは、その家族です。親は子に対して、また子たちは親に対して責任があるのです。親に、自分の子供の世話をする義務を負わせているその誓約は、同様に子供にも、必要があれば自分の親の世話をするという責任を与えているのです。「あなたの父と母を敬え」(出エジプト20：12)というこの戒めは、現代のイスラエルの民にも適用されるものであり、忠実なすべての教会員に求められていることです。

家族の自立の原則から考えて、私たちは、個人の物質的な問題や必要を解決するのに、

家族ができる限りのことをするまでは、決して教会の資金に援助を求めてはならないということを認識する必要がありますでしょう。これが主の定められた教義です。主はこのように言われました。「丁年に達したるのちその両親相続物として彼らに与うるもの無き時は、教会すなわち言い換えれば、主の倉庫に向いて要求する権利を有す。」(教義と聖約83：5)

この原則は、例外なくすべての家族にあてはまります。

もし私たちが行ないや望みの点で一層神に近づき、主のみたまを受けるならば、これらの同じ原則がさらに広範囲な家族すなわち兄弟、姉妹そして系図の中に出てくる叔(伯)父、叔(伯)母、いとこといった血縁者にもあてはまるのがわかるでしょう。助けを与えるというこの責任は、確かにそのような広範囲な家族に対しては、身近な家族に対する程重要ではありませんが、私たちが「一人一人みなその財産の多い少いに応じてそれを貧しい人々に分け与えること……たとえば、腹のすいている者に食物を与え、はだかである者に着物を着せ、病んでいる者を見舞い、各々の必要に従って肉体についても霊についても救助を施すこと……」(モーサヤ4：26)の意味をしっかりと理解し、それを守るならば、決してその報いを失うことはありません。そのような配慮や祈りを受け、私たちの援助を受ける人々の生活に、今述べた家族愛はどんな結果をもたらすでしょうか。彼らのまた私た

ちの現在の霊的状态がどうであろうと、そうした血縁の人々に誠実な愛ある思いやりを示すことは、最終的にどのような影響をおよぼすことになるでしょうか。私たちが「愛はいつまでも絶えることがない」(Iコリント13:8)という約束を精一杯実行に移すよう努めるならば、想像以上に大勢の人々の生活が変わり、さらに多くの幸福がもたらされるでしょう。

私たちが主にならった見方をすれば、兄弟姉妹、血縁の人々の中で困っている人々のために私たちにできることはまだまだたくさんあります。主はこのように言われました。「汝ら皆己が身の如くに兄弟を思うべし。汝らの中誰か十二人の息子(兄弟、姉妹、いとこ、叔(伯)母、離婚したり一時的に失業している親戚たち)を持つに、その一人にのみ偏よることをせざれば……また他に向いて汝ばろを着て彼所に居れと言ひ、しかも息子たちに向いて、見よ、われ公平なりと言うことを得んや。見よ、こは一つの比喩を以て汝らに語るころなれど、正にわれ在るが如く真なり。われ汝らに向いて言わん、汝らひとつとなれ。もしひとつとならずば、汝らはわがものにあらず。」(教義と聖約38:25-27)

これら相互の責任をわかりやすく言うところのようになると思います。すなわち、身近な家族にはお互いに助け合う責任があり、広範囲な家族にはお互いに助け合う機会があるのです。キリストのような愛に対する私たちの理解が深まるにつれて、私たちは喜

んでそのような機会を利用し助けを与えるようになるでしょう。

この世の救いに関して、個人の自立や家族の自立という基本的な概念を頭に置いて、それらが教会の福祉計画、個人や家族としての備えについて勧告されている事柄とどのような関係があるか調べてみる必要があります。

現在、個人としてまた家族としての備えに必要なことは十分明らかにされています。明らかにされていない点といえば、個人として家族としてどの程度まで自立したらよいかということでしょう。今日直面する問題に対処するには、まず私たち一人一人が受けた勧告に忠実に従うことです。最初は個人でそれから家族単位で従うのです。直面している問題や必要が、個人と家族というふたつの力にとりていおよばないことがわかった場合にはじめて、私たちは監督を通じて教会に援助を求めます。

監督を通じて教会の援助は、明確な指針にそって与えられます。私たちは監督に、個人と家族の自立の原則は、教会福祉プログラムの一部として確固たるものであると指導してきました。このように、監督は個人と家族の備えを教えることに重点を置くならば、ワード部内の各家族が自立していけるよう援助する方法を容易に見いだすことができるでしょう。

では、監督は自分の所に援助を求めてくる人々に、その前に何をして欲しいと望んでいるでしょうか。福祉プログラムができ

て間もない頃、J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長は、身も心も健全な人々すなわち自立していける人々に対して、このような勧告を与えています。

「収入の範囲内で生活しなさい。借金から逃がれ、借金を避けなさい。人生に常につきまとう予期せぬ問題のために、貯金をしなさい。質素儉約、勤勉の習慣を身につけ実践しなさい。」(Conference Report「大会報告」1937年10月, p.107)

「すべての家の家長に、最低1年先までの十分な食糧、衣服できれば燃料を手元に備えさせなさい……庭のある人には菜園を作らせ、農場のある人には耕作をさせなさい。」(Conference Report「大会報告」1937年4月, p.26)

では、「備える」とはどういうことでしょうか。数年前、だれかが私に真剣にこう尋ねました。「あなたの1年分の貯蔵品の中で最も大切なものは何ですか。」私は本気でこう答えました。「自分の正しい行ないです。」これまでも勧められてきているように、私たちが1年分の食糧や衣服、できれば燃料を貯蔵するという事は大切なことです。また私たちはまさかの時のために、そして健康保険や火災保険、生命保険などをかけておくようにとも言われています。しかし、個人や家族としての備えはそれらの物資よりもはるかに広範囲なものです。ぜいたく品を後回しにする、大きな買い物をする場合には祈りの気持ちで考慮する、収入の範囲内で生活するなどのふさわしい態度が要

求されるのです。

残念ながら、調査の結果教会が自分たちの世話をしてくれると信じきって、この勧告に従っていない人々が私たちの中に大勢いることがわかっています。監督が手にすることのできる最大の力は、ワード部内の個人個人および家族の力なのです。会員の方々は、監督が一定の指針にそって行動しなければならないことを知るべきです。監督たちは、会員に賢明な生活をし、まず第一に自分自身や家族の力に頼るように教えるよう指示されています。そうしてはじめて、監督はワード部の会員に対して教会からどんな援助をしたらよいかを決める責任を主から受けている者として、教会の力に頼ることができるのです。

その力となるものは食糧やその他の物資、断食献金の資金だけではありません。食糧よりももっと私たちを満たしてくれる物、衣服や燃料よりももっと暖めてくれる物、お金よりももっと長持ちのする物など、監督が与えることのできる力は他にもたくさんあります。すなわち、霊的、物質的問題を解決する上で役立つ福音の真髄とその能力です。主御自身の方法で援助を与える際に、監督がまず第一にしなければならないことは、聖徒たちがいろいろな欲求や必要を満たすために、生活の中で実践していける正しい原則を教え、彼らを強めることです。監督はまた、メルケゼデク神権定員会の中から力となってくれる人々を見い出す手助けもできます。彼らは、長期間にわた

る問題を克服する上でさらに細かいアドバイスや訓練、援助を与えてくれるでしょう。

このように、監督は第一の責任として個人の自立、家族の自立の価値を教えなければなりません。確かに主の牧者として、監督は人を高め、支持し、維持し、更新させ、清め、聖別し、完全にし、私たちのあらゆる必要や正しい望みをかなえさせてくれる福音の力と併せて、福音のすべての原則を教えなければならないのです。監督は、個人的な目標や目的を決めるために、また個人的な計画や問題に対する解決法を見いだすため、すなわち自分で正しい道を歩めるように自分自身の環境を評価して欲しいと求めてくる人々に、援助の手を差し伸べなければなりません。監督が私たちに代わってそれらをしてくれるわけではありません。監督の主な役目は、相談役すなわち信頼できる友となることです。監督は私たちがどんな差し迫った必要にも対処できるよう助けてくれますが、その援助の度合は私たちや私たちの家族がその問題を解決するために何をしたかによって決まるのです。身近な問題は個人や家族が努力して解決することから考えると、教会からの援助は、普通その問題が解決するまでの短いギャップを埋め合わせるほんの一時的なものにすぎません。

私たちの中の貧しい人々を助けることに加えて、私たち自身にも皆福祉プログラムが必要であることを思い起こさなければなりません。その根本的な理由のひとつに、

監督が手にすることのできる最大の力は、ワード部内の個人個人および家族の力なのです。

御父が私たちに多くの大切な永遠の真理を教えようとされていることをあげることができます。それらの真理の中で、最も根本的なものは愛すなわち慈愛です。自分自身を一步抜け出して、他の人々に思いをはせる時、そこには計り知れない進歩が見られます。他の人々の進歩と成長のために喜んで働くということが天父の主な仕事であることを考えると、私たちが真の天父の息子、娘となれるその愛の力を自分の生活に浸透させないで、どうして父の持てるすべての物を受けようなどと考えられるでしょうか。

私は次のいくつかの基本原則を再確認してきました。(1) 自立は、この世の救いにとって永遠の重要な原則であること、(2) 家族としての自立もこの世の救いにとって重要な原則であり、多くの物質的な問題に対する答えになること、(3) 会員の中には優先順位を考え直し、場合によっては「ゼいたく」という言葉の意味を再評価し、それらを後回しにして必需品を十分に備える必要のある人々がいること、(4) 会員は福祉

計画の中の監督の役割、すなわち監督は、一定の指針に従い、それらの指針の範囲内で神の靈感によって教会からの援助を与えらるということを理解しなければならないこと。以上の事柄を述べてきました。

私はまたすべての末日聖徒に、もう一度個人と家族の備えについて考えてもらい、独立独歩の精神を養うための原則や手段を直ちに実行に移してもらいたいと思っています。これらの真理を、家族会議の際に話し合ったり、それらの原則にそった生活をするために自分たちにできることをすべて

しようという計画を立てるならば、次のような主の約束を受けるでしょう。「もし汝らに備えあらば怖ることなからん。」(教義と聖約38：30)

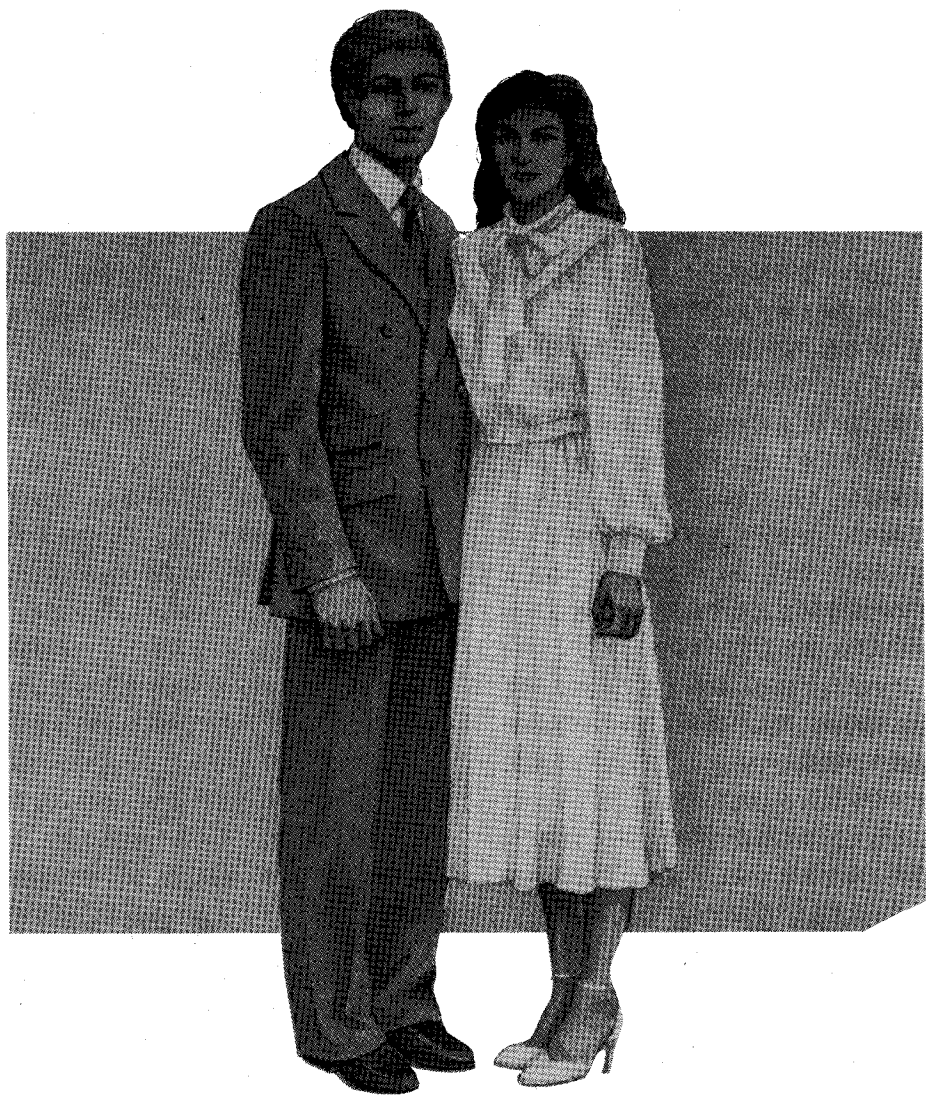
さらに大切なことは、私たちが神のみこころにかなった正しい生活をするならば、それ以上に大きな約束を受けるということです。「およそ何人にまれ、忠実にして正しく、且つ賢き管理人はその主の悦びに入りて永遠の生命をつぐべし。」(教義と聖約51：19)

ホームティーチャーへの 提 案

1. 自分と家族のために働き、備えることが大切であることを述べる。備えをすることの祝福について、個人的な経験があれば話す。個人の自立と家族の自立に対する家族の人々の気持ちを述べてもらう。
2. 家族が、どんな経済的な問題が起きても対処できるようなより良い備えをするにはどうするか話し合う。
3. 教会員はなぜ緊急時のために、ロムニ一副管長が提案しているような備えをしておかなければならないのだろうか。
4. この記事の中に、家族が声を出して読んだ方がよいような引用や聖句があるだろうか。またこの記事と一緒に読んだら効果的と思われる聖句がほかにあるだろうか。
5. 前もって訪問先の家長と打ち合わせておくと、よい話し合いができるのではないだろうか。個人と家族の備えに関して、定員会のリーダーや監督から何かメッセージがないだろうか。

最善の努力をしていますか

バル・R・クリスチャンセン



数カ月前のことですが、同窓会に出席する機会があり、何年ぶりかで旧友たちと再会しました。数年会わなかった間に、頭がすっかり薄くなってしまった人、太った人、やせた人など顔を見違えた人が何人もありました。心理面、靈的面上における変化がはっきりと表情に表われている人もいて、大変興味を覚えました。

特に私はひとりの女性に興味をそそられました。高校時代の彼女は内気で目立たず、男の子の間ではさほど人気のある方ではありませんでした。ところが数年振りで同窓会に出席した彼女は、際立った美しさと魅力を兼ね備えた女性に変身していたのです。彼女が情緒的あるいは靈的に成長したことは、心の平安を反映しているその美しい表情を見てははっきりわかりました。私はその夜の同窓会の間中彼女とそして共に出席していた彼女の夫とを観察した結果、彼女を成長に導いたものが何であるか見つけ出すことができました。それは彼女が朗らかで積極的な、しかも心の支えになってくれる夫を持ち、女性として最も大きな祝福を得ていたからです。そしてふたりは、それまでの結婚生活を通じてお互いに成熟した幸福な人物に成長していたのでした。

このように熱心に観察することによって、私は結婚後の個人の進歩は各々の伴侶の生活態度が積極的であるか、あるいは否定的であるかに大きく左右されることを見いだしました。事実皆さんの考え方ひとつで伴侶の立場が大きく変わります。自分を奴隷のように思い、不満だらけの生活を送る人もいれば、進歩的ではつつとした魅力あふれる人物になる人もいるのです。

数年前のことですが、私はある女性から相談を持ちかけられました。夫が無責任で、何事に関しても非常に否定的だと言うのです。彼女の夫は毎日仕事から帰って来るなり家の中が散らかっていると言っては不平を言い、夕食の時間が遅くなるようなことがあると、すぐに批判的な言葉が出てくるというのです。彼女は、自分が夫の望むような魅力的で知性にあふれた女性ではないかと思っていました。また、夫は子供に対しても冷たい否定的態度を取るようになっていたとのことでした。

そこで私は、御主人に対してあなた自身はどういう態度を取っていますかと尋ねました。夫の心を傷つけるようなことをたくさんしているとのことでした。事実、夫を怒らせるためにわざと食事の時間を遅らせたことも何度かあったそうです。また同じように、家をきれいにしようという気持ちがないので、家の中はいつも散らかっているとのことでした。また夫がきれいに身づくろいするように言えば言うほど、彼女はそうすることが白々しくなっていました。つまり、夫をほめたり喜ばせたりすることは、ほとんど何もしていなかったのです。

しかし私は、彼らが今置かれている状況から抜け出し、よりよい結婚生活を送るために努力しようとする基本的な愛情をそこに感じる事ができたので、いくつかの提案をしました。まず家に帰り、きれいに身づくろいをして家の中を片づけること、そしてよい本を数多く読んで、知性美あふれる女性になるように努力すること、毎日仕事から帰って来る夫を笑顔とやさしい態度で迎えることなどです。

彼女の急激な態度の変化は、夫には相当のショックだったようです。最初のうち何か下心があるに違いないと、妻の真意を疑っていた夫も、自分に接する妻の態度が全く変わらず、いつも誠意にあふれているのを見て、次第に気持ちがほぐれていき、妻への感謝の言葉が彼自身の口から聞かれるようになったのです。家族と共に過ごす時間も増え、子供との間にも愛情が通い合うようになりました。この夫婦の生活態度が再び前向きになり、多くの祝福を受けられるようになったのはそれからすぐのことでした。

否定から肯定へ

否定的だった生活態度を前向きの姿勢に変えるだけで、素晴らしい変化が人々の生活の中に起こります。むろん意識的に伴侶をないがしろにしたり、夫あるいは妻としての責任をおろそかにする人はほとんどいないと思いますが、しばしば私たちはお互いの良い性格や伴侶が自分のためにしてくれたことを当然のこととして、感謝の気持ちを伝える事もないままに過ごしてしまうようなことがあるのは否めません。ある時私は監督からの依頼を受けて、一組の夫婦と話す機会がありました。その夫婦は互いに抱いていた不満を洗いざらい私に話し始めたので、私はお互いが初めて会った時に抱いた気持ち、何年も前にふたりで立てた目標、また共に分かち合った喜びなどの方向に話題が進むようにし向けました。彼らは家族、友人、その他彼らの人生において出会った重要な人々について語り始め、次第にふたりの表情の中に喜びの気持ちが読み取

れるようになっていきました。話し合いはそれまで夫婦の間で大きな問題点であった経済的問題にまで及び、夫婦はもう一度彼らの最終目標を確認するに至りました。話を進めていくうちに、対立していた気持ちがほぐれていくのが手に取るようわかりました。その後数回、このような話し合いを持った後、ふたりはもう一度やり直す決心をすることに同意しました。夫婦関係に亀裂が生じる原因としてよくあげられるのが、私たちが「否定的なフィードバック」と呼んでいるものです。フィードバックが、当然与えられるべき時に与えられなかったり、また反対に必要な時や相手が受けたくない時に与えられたり、内容が不明確だったりすることがしばしばあります。否定的なフィードバックは、相手が希望した時だけに限るべきです。すなわち、人は自分が父親あるいは母親、家長、さらには神権指導者として十分な働きをしているかどうか評価を求めたいと思うことがよくありますが、これはあくまでも相手が望んだ時のみ行なわれなければなりません。

批判する前に自問する

結婚生活において伴侶から意見を聞くことは、互いに成長する上で大変重要です。しかし否定的な意見ばかり聞かされたのでは、落胆するだけです。このような理由から私はめったに伴侶に対する批判はしないようにしています。どうしてもその必要がある時には、シドニー・B・サイモン博士によって指摘された6つの質問事項を、まず私自身に問いかけた上で、注意深く行うようにしています。6つの質問事項とは以

下にあげる事柄です。

1. 伴侶は今、批判を受けるにふさわしい状態にあるだろうか

仕事から遅く帰宅し、夕食後の楽しいひとときを家族と共に過ごせなかった時などは、忠告をするのにふさわしい状態と言えるでしょうか。このような時は疲労で神経が高ぶっていますから、うまく言い表わすことができません。またこのような時の忠告は相手も素直に受け入れられないものです。十代の子供を持つ両親は、夜遅くまで帰宅しない子供を安じて、無事な姿を見るまでいらいらしながら待つことがよくあります。しかし無事に帰宅した子供の姿を見るなり、喜びは消えて、不満をその子供にぶつけてしまうのです。このような場合に遭遇した時には、ひとまず無事に帰宅したことに対する喜びの気持ちだけを伝え、一晩ぐっすり休んだ後に、その問題について話し合うのが賢明のようです。

2. 批判をした後、話し合いの時間を持つ

批判した後、相手に弁解のチャンスを与えないのは、その人に非常に大きな衝撃を与えることとなります。ある男性は出張に出かける直前に妻から批判の言葉を受けました。数日の出張期間中、彼は弁解できないために非常に苦しみ続け、そのためビジネス旅行は^{談話}惨憺たる結果に終わったということです。

3. 伴侶は以前同じ批判を受けなかっただろうか

もしあなたが伴侶に、ガレージや台所の

掃除、脱いだ後の洋服を片付ける、子供の世話をするなどのことを頼んだとします。しかしその後も何の変化も見られないとしたら、別の方法を講じる必要があります。同じことをくどくどと繰り返されることには、人は耳を貸さなくなってしまうからです。

4. 伴侶は批判を受けたことに関して、自分自身を変えることができるだろうか

時々私たちは人々を内気だとか、太り過ぎ、やせ過ぎ、軽率、鈍感などの理由で批判することがありますが、このようなレベルの批判は改善することが非常に困難で、時には不可能でさえあります。ある妻は夫に向かって背の高い男性と結婚したかったと不平を言いました。その夫はもう背が伸びない年齢に達してしまっていたので、彼にはなすすべがありませんでした。私たちは完全になるよう努力すべきではありませんが、批判を加えようとしている人は、分別を持って現実に相手が改善し得る批判であるかどうかよく考える必要があります。

5. 批判は自分自身の苦痛や不安、心理的欲求不満の表われではないだろうか

自分が自制を失ったり他人に対して怒りの感情を抱いたりしている時は、すぐにわかります。夫婦間での話し合いで、各々の感情に自制がきかなくなると、心臓の鼓動は速まり、言葉遣いにも配慮が欠けるようになります。そうなると、話し合いは確実に口論へと進んで行くのです。

6. 伴侶は今、否定的な言葉を受ける必要があるだろうか。積極的に愛と関心を示

す方がより効果的なのではないだろうか。ほとんどの人は自分の欠点を認め、改善することを望んでいます。それには、愛や理解、支持を受けることによって人生の最高の目標に向かって前進するようにならなければなりません。しかし否定的な意見ばかり受けたり、感謝の気持ちを全く伝えられなければ、自分を改善することはほとんど不可能でしょう。

盲点をなくす

私たちは皆、自分で気がつかない盲点を持っています。お互いに心から注意し合える雰囲気を作ることは大切です。それゆえ、夫婦間の愛と信頼は確実にしかも大きく築き上げていく必要があります。相手を批判する動機は、心から助けたいと望む気持ちが基礎になっていなければなりませんし、また受け入れられるように細心の注意をはらって相手に伝える必要があります。あなたが肯定的意見であっても否定的意見であっても喜んでその批判を受ける心の準備があれば、伴侶も正しい批判がしやすくなります。そしてあなた自身もその忠告を受け入れやすくなり、より高い地位へと自分自身を変えて行くことができるのです。話し合いの場を持ちましょう。家庭の状態、あるいはあなたの伴侶に対する態度などについて、伴侶に評価する機会を与えて下さい。どうしたらより良い夫、父親あるいは妻、母親になれるかと相手に尋ねることは話し合いを始める上で良いきっかけになります。真実の愛と関心によって正当な批判が行なわれる時に、あなたが考えるよりもっと早く必要とされる変化がもたらされる

でしょう。

幸福な結婚生活へのステップ

結婚生活を楽しいものにするために、具体的に何をすればよいでしょうか。

1. リストを作る

あなたの伴侶についてあなたがかけがえないほど大切に思っていることを、すべて書き出してみます。可能な限り時を求婚時代にまでさかのぼって、その間あなたが感じた素晴らしい特質を全部列挙します。以前私はある夫婦にこれと同じことを提案しました。ふたりはふたつか3つ位しか書けないだろうと考えました。その作業は最初、「料理が上手」とか「ユーモアのセンスがある」と言ったような比較の見つけやすい性質から始まり、次第に各々の心の奥深くにあって見落とされがちな長所にまで至り、彼らは予想したよりもっと大きなリストを作りました。

2. 伴侶の長所を率直にほめる

子供や友達、またあなたの周囲の人々に、あなたが伴侶に対して抱いている賞賛の気持ちを素直に伝えることは非常に大切です。このようなことは自慢やエゴイズムとは関係がありません。あなたの伴侶はあなたの賞賛の言葉を喜んで聞き、あなたにも同じように接するでしょう。

3. あなた自身の否定的感情にいつも目を向ける

時折私たちは怒りを爆発させたり、人前で伴侶を批難したりすることがあります。

また無作法な振舞いはたとえそれが家庭の中であったとしても、夫婦間に感情の対立を生ずる原因となるものです。またこのような感情が一度芽生えると、取り除くことは大変困難になります。したがって私たちは、感情的になることは極力避けるように努力する必要があります。

4. ロマンチックな愛を再燃させる

どんな夫婦でも、ロマンチックな気分でも過ごした楽しい時期があったはず。その頃の気持ちにもう一度立ち返り、共に過ごした楽しい時間、美しい思い出、飽きずに話したことなどを思い出してみてください。このようなことはその時期のふたりにとってとても重要であったはず。そこからもう一度、心からの愛と関心を分かち合える方法を見つけ出すのです。もう一度恋愛時代に戻りましょう。

5. 静かに話す

建設的な雰囲気のある家庭では、家族全員が互いに尊敬し合い、荒っぽくどなり合う声はほとんど聞かれませんが、家庭をより良いものにするためには、怒りは必要ではありません。相手をほめ、やさしく励ます言葉だけが、相手を進歩に導くのです。

6. 高潔さを持続させる

各自が正直と高潔に関して高い水準を持つことは結婚後ふたりが信頼し、愛し合っ
て良い関係を築き上げて行く上で大きな助けとなります。また、悔い改めと寛容な心によって、失われていた高潔な感覚を呼び戻すことができます。

7. 信仰を増し加える

おもわしくない問題をかかえている多くの家庭では、一般的に主に対する従順さに欠けていると言えます。夫婦が共に祈ること、聖典を学ぶこと、教会の集会に出席し責任を果たすことなどは、きわめて重要です。このようにして福音を実践することにより、家族は霊的に成長し、多くの祝福を得ることができます。そして主への積極的な献身は私たちの人生にとって大切な進歩成長をもたらすのです。

自分のことをデリケートで大切な存在だと思わない人はいないでしょう。人間の内にひそむこうした積極的な気持ちが強調されれば、私たちは思ったよりも簡単に変わることができます。

私たちは、伴侶の否定的な生活習慣を批判するだけで一生を過ごすこともできますし、また反対に「愛しています」「あなたは私にとって大切です」「次はもっと上手にできるよ」「失敗から学んでいけるよ」あるいは「いつでも喜んで助けるよ」というようなやさしい言葉によって伴侶を積極的に導くこともできます。

こうした積極的な言葉によって培われた結婚生活は、ふたりにとってかけがえのない素晴らしい時となるに違いありません。

☆

☆

クエンカ兄弟の信仰

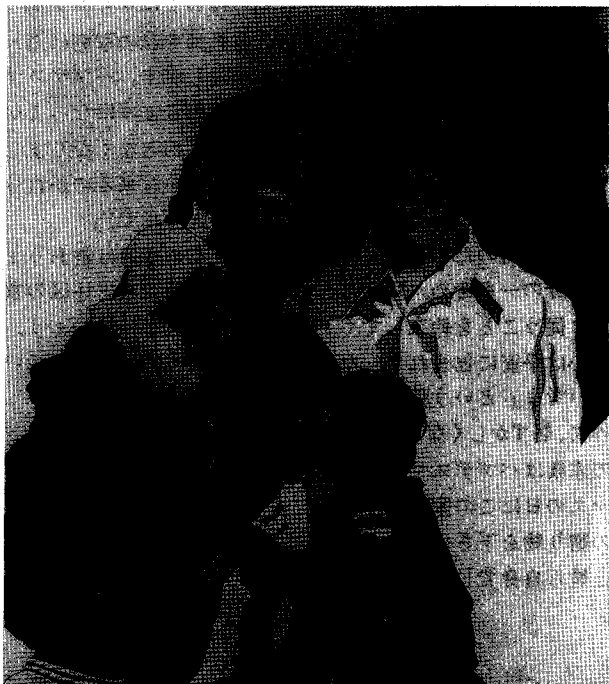
フレッド・R・グラデン・ジュニア

宣教師のゾーン大会が終わりました。私は同僚と連れ立って、カリフォルニア州フレズノにある小さなアパートに帰り、午後の集會に備えました。クリスマスに近い12月16日のことです。私はクリスマスの日に、バプテスマという特別な贈り物を求道者の家族に差し上げたいと思っていました。そこで、同僚と共に冷たい床にひざまずき主の導きを求めて祈りました。

午後になると車に乗って、町の東側にあるメキシコ人の小さな居住区に向かいまし

た。そこには、街頭伝道で最近知り合ったクエンカさんの家族が住んでいます。全部で15人の大家族です。私たちは熱心なまなざしをした子供たちに温かく迎えられ、コートのスそを引っぱられて中に入りました。それから5、6分かけて13の小さな手と握手し、ようやくレッスンが始まりました。

私の同僚が不慣れなスペイン語で、最初の概念を教えました。それを聞きながら、私はクエンカさんの家が実に質素であることに気づきました。部屋にはソファーがひとつに、台所から持って来た壊れかけた椅子が2、3脚、それに熱心に耳を傾けている15人の家族、ほかには何も見当たりません。私が教える番になりました。私はみたまに導かれるままに、バプテスマのチャレンジをしました。クエンカさんの家族はそれを



受け入れました。

クエンカさんの家は、靈的には恵まれていても、物質的には貧しい生活を送っていました。クエンカ兄弟は時給2ドル80セントの仕事についていました。彼の話では、食物のある時は家族で食べますが、いつもは断食をするそうです。しかし、クエンカさんは私たちのためにいつも食事を用意してくれました。家族みんなが、宣教師は「天からの使い」だと信じていたからです。私は彼らの乏しい食物を食べる時に、部屋の隅や戸口からのぞき込む飢えた茶色の瞳を感じて、とても天使のような気持ちにはなれませんでした。たとえそれがわずかな食物であっても、この家族にとっては大変な犠牲だったのです。

やがて戒めを教える段階が近づくと、私はクエンカさんの家族がそれを受け入れる信仰を持てるようにと、主に祝福を願い求めました。しかし、信仰のうすい私は、什分の一の戒めを受け入れるのは無理だろうと思っていました。レッスンが進み、ついに什分の一の原則を教える日が来ました。同僚が教え始めると、私は心の中で助けを求めて主に祈りました。次に私が教えました。私の信仰はまだ揺れ動いていました。しかし、彼らの返事には何のためらいもありませんでした。什分の一を含め、教えられたすべての戒めに従うことを約束してくれたのです。私の心は平安に包まれました。しかし「信仰の薄い者よ」という救い主の言葉を思い浮かべて、恥ずかしくなりました。

クエンカさんの家族はバプテスマを受けました。クリスマスの日にこの家族は、彼らにできる唯一の贈り物を下さいました。それは彼らの愛と彼ら自身でした。クエン

カさんの家族は、歌と踊りと物語を通してメキシコ人の文化を紹介してくれました。私たちはおもちゃと食物をプレゼントしました。それからクエンカ兄弟が中心になって、クリスマスの祈りを捧げました。その夜遅く、私は1日の出来事を振り返って思いました。きょうは私の生涯で最も素晴らしいクリスマスだった、と。クエンカさんの家族はすべてのものを、つまり彼らの愛を贈って下さったのです。

やがて1月が来て、私の伝道も終わりに近づきました。その日は断食安息日で、私はスペイン語を話す会員のために証会の通訳を頼まれていました。すると、クエンカ兄弟が証をするために前に出て来るではありませんか。私はそれを見て胸がいっぱいになりました。

クエンカ兄弟は説教壇の前に誇らし気に立つと、話し始めました。それを聞いて、私のほおを温かい涙が伝っていきました。

「宣教師を私の家庭に遣わして下さいましたことに感謝します。バプテスマを受けて什分の一を納めるようになってから、私の家では食べ物に困らなくなりました。時には、それがどこから来るのか自分でも分からないこともあります。」

今、私の伝道は終わりました。しかし私は、メキシコ人居住区の質素な家のことを決して忘れないでしょう。主が私に信仰と従順と、そして祝福について教えて下さったあの家のことを。

フレッド・R・グラデン・ジュニア

ブリガム・ヤング大学の学生、ユタ州プロボの宣教師訓練センター(MTC)のスペイン語教師。

私があなただを 遣わした

キヤサリーン・スコット

私は廊下で、最近転入してきたひとりの姉妹と話をしていました。扶助協会会長である私には、新しく入って来たすべての姉妹とあいさつし、私たちの歓迎の気持ちを伝える責任がありました。その時私は急ぎの用があったため、姉妹との話もそこそこにその場を去ったのですが、彼女のことが何となく気がかりでした。でも、それ

は思い過ごしかもしれないと、私は気に留めないでいました。

2週間ほどして、家事をしていると、心の中に「〇〇姉妹に話しかけなさい」という思いがわいてきたのです。「彼女に何を話したらいいのかしら。」私はつぶやきました。すると、こう答えが返ってきました。

「私があなただを遣わしたと伝えなさい。」私はこれが主からの言葉であるとわかっていましたから、みたまの勧めを無視することはできませんでした。

次の日曜日、私はこの姉妹を捜して、個人的にお話したいと伝えました。私は彼女に何を話すつもりだったのでしよう。みたまのささやきがあまりにも強い印象を残したため、それまでの私は心をあやつられていたかのようでした。「困ったことがある

彼女から不幸のわけを聞いた時、私は自分が彼女の苦しみをわかってあげられるひとりであることが、はっきりとわかりました。



のではないですか。」私はやっとのことで姉妹に言いました。「主が私をあなたのところに遣わされたのです。」すると驚いたことに、彼女の目から涙があふれ、ほおを伝いました。それは自分をみじめに思う涙ではなく、喜びと感謝の涙でした。

「この2カ月、私は自分の問題をだれに打ち明けたらいいのか主に尋ね求めていたのです。」彼女はこう答えたのでした。

私は彼女の目をまっすぐ見て言いました。「姉妹、あなたがどんな問題をかかえているのかわかりませんが、それを打ち明ける相手はこの私だと思いますよ。」

彼女から不幸のわけを聞いた時、私は自分が彼女の苦しみをわかってあげられるひとりであることが、はっきりとわかりました。私も同じような経験をしたことがあったので、彼女の気持ちがよくわかり、励ますことができたのです。私はこう思いました。内密にすべき個人的な事柄は監督に伝えてその知恵と権能に頼るのが当然なことですが、それ以外のことならば、だれかが理解の心をもって聞いてあげることでずい分と苦しみが軽くなるものだという事です。

みたまはほかにもたびたびこのような助けを差し出すよう、私にささやきかけました。そのたびに私はいつも思いがけない結果に驚かされます。私たちのだれかがみたまの勧めに従順に従い、話を聞いてあげることもしないなら、主はほかにどのような方法でみ業を達成されるというのでしょうか。

キャサリーン・スコット

5 児の母親、英国セントオールバンズステーク部の広報ディレクターとして働いている。

聖徒たちの集う 礼拝堂を

ロナルド・C・バーカー

礼 拝堂を建てることには、土地の購入や業者との交渉を越えた何かがあります。数年前、ソルトレーク・ハンター西ステーク部のエバンズ・T・ドクシーステーク部長の副ステーク部長として働いていた私は、建築用地を獲得する責任を受けました。教会の急激な発展によってどうしても教会堂を建てるのが急務となってきたのです。当時、ステーク部で礼拝堂を持っているところは2箇所しかなく、その2箇所の建物でそれぞれ4つのワード部が集会を開いている状態でした。

私たちは祈りの気持ちでひとつの用地を選び、数カ月間にわたって交渉してきましたが、結局その用地を購入することはできませんでした。次に北方の用地を選びましたが、都市計画の関係で問題がありました。また南の方面で選んだ土地は、事前の調査の段階で政府から建築許可がないことがわかりました。4番目に選んだ用地は距離の点と、土地が斜面になっているので下水を引くのに費用がかかるということで

駄目になりました。

そしてそれから2年が過ぎました。ほとんどすべてのワード部がもうすでに分割していなければならない状態に来ていました。早急に何らかの対策を講じなければなりません。

ドクシーステーキ部長はステーキ部全体に、主の助けを求めて断食と祈りをするよう呼びかけました。それから2日後、最初に購入を予定していた用地の地主から電話があり、土地を売ってもよいと言ってきました。

また、当時ステーキ部分割の話が進められていたこともあって、ドクシーステーキ部長から、今度は新しいステーキ部センターの用地を購入する責任をもらいました。私たちは入念に調査し、祈り、そしてハンター第6ワード部のふたりの会員が所有する1.6ヘクタールの土地を選びました。監督の手配で、私はその2家族の人々と会うことになりました。最初の家族は0.8ヘクタールの土地を寄付することに快く応じてくれました。ところが、もう一方の家族の方の夫はまだ改宗して1年位しかたっていない人ですが、彼がこう言ったのです。「それで皆さんがなぜ私たちを呼ばれたのかはやっとわかりました。」

彼は前の晩に夢を見て、夢の中でこの同じ部屋に呼ばれたと言うのです。そこにはきょうと同じ人々が座っていました。そして私が、彼の隣の人がステーキ部センターのために0.8ヘクタールの土地を寄付することを承諾してくれたことを説明し、その人にも残りの半分を譲ってくれないかと頼んだというのです。彼はすぐに奥さんを起こし、その夢のことを話してまた眠りまし

た。ところがしばらくしてまた同じ夢を見たのです。そこでもう一度奥さんに話して寝ました。ところがまた同じ夢を見ました。とうとう3度同じ夢を見、その度に奥さんを起こしてそのことを話したということです。ついに奥さんはこういいました。「神様にあの土地は教会でお使い下さいと言って寝て下さいよ。」

現在その土地に新しいステーキ部センターが建てられています。

ステーキ部の分割の後、再びドクシーステーキ部長がこの新しいハンター・セントラルステーキ部を管理するようになりました。そして、再び私にある建築用地の購入を頼んできました。その土地の所有者はステーキ部内でも最も忠実な未亡人の会員でした。この話を持っていくと、その会員は土地を売るつもりはないが、ステーキ部に寄付するのであれば喜んで致しますと言ってきたのです。

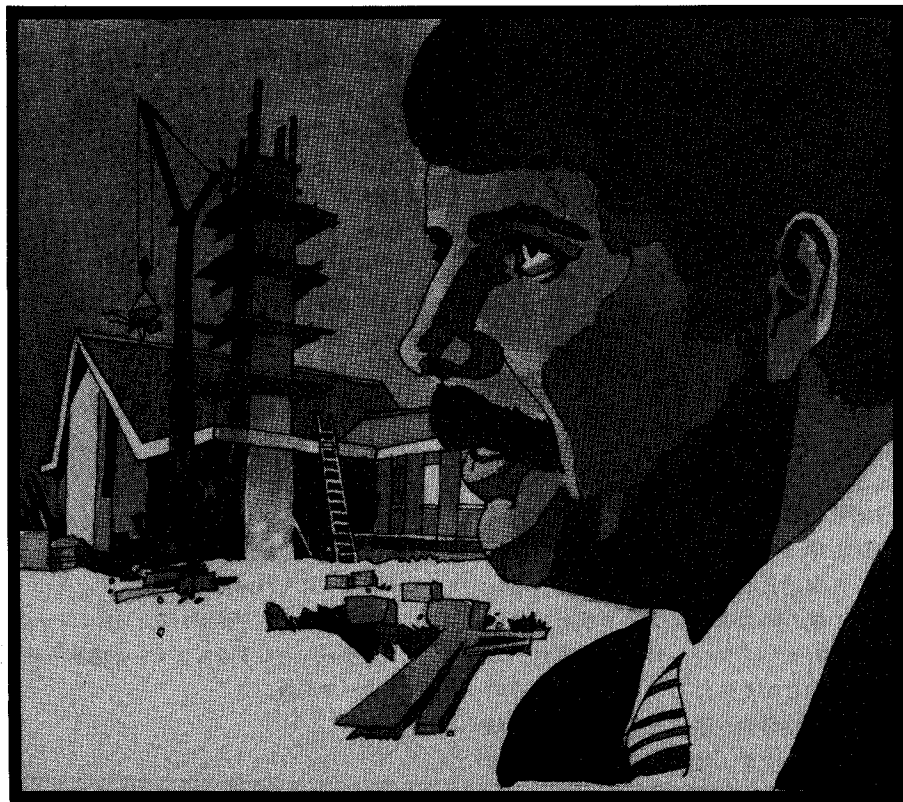
このような経験を通して、私は立派な教会会員の忠実さ、愛、そして心の広さに何か今までになかった新鮮なものを感じました。と同時に、こうした実際の働きの中にもいつも主の助けがあることを改めて知ったのでした。

ロナルド・C・バーカー

弁護士、9人の子供がいる。ソルトレーク・ハンター・セントラルステーキ部第一副ステーキ部長。

犠牲を通してもたらされる 成長と発展

カーマ・T・ブリーとロイ・A・ブリー



19 77年に、新設されたカナダのオタワ
ンタリオステーク部は独特のチャレンジ
に直面していました。この大きなステーク部
本部は、オタワのいくつかの伝道部を初め
として、東オタリオとケベック州の一部
とニューヨーク州北部を含んでいました。
したがってこの新しいステーク部は、いろ
いろな人種により構成されていました。そ
中にはカナダのモントリオールの中国人支
部もあり、香港伝道部からのふたりの宣
教師が伝道を手伝っていましたし、カナダの
ホークスベリーにはフランス語と英語の2
カ国語を併用している支部があり、またニ
ューヨークのセントリジスインディアン保
留地にあるホーガンズバーグには、レーマ
ン人だけの支部があるという具合です。

新しいステーク部で今すぐ必要とされて
いたのは、適当な建物の建築でした。とい
うのは、多くのワード部や支部は、公会堂
や学校を借りて集会を開いていたのです。
私たちのステーク部のボイデン・E・リー
ステーク部長は、この地域で教会がもっと
急速に発展する前にふさわしい礼拝堂を建
てるべきだと感じていました。ステーク部
建築5カ年計画が始まりました。けれども
最初の年の終わりには、その成果はわずか
なものでした。

そこでステーク部長会は必要な額—100
万ドルを2年間で集めるための特別プロ
グラムの実施を決定しました。リーステ
ーク部長はこの決定についてとても心配して
いました。インフレーションの期間であり、
財政的圧迫があるのに、短期間にこのよう

な巨額のお金を、ステーク部の会員たち
にどのようにしてお願いすればよいのでし
ょう。彼は、ステーク部特別大会の準備を
している時、ステーク部内の会員たちに特
別な祝福と約束を宣言し、この約束を、個
人の祝福を与える時と同じように、神権の
力によって結び固める必要性を強く感じ
ていました。彼は初め躊躇していましたが、
どうしてもその考えが頭から離れなかつた
のです。

大会では特別なステーク部建築資金獲得
プログラムが提示されました。成人会員
は大会に来る前に断食と祈りをするよう
に求められていました。大会の終わりに、
リーステーク部長はステーク部内の会員
に特別な祝福が与えられることを宣言し、
もしできる限りのことをすべて行なうな
らば、主は扉を開かれ、自分たちの建物
で集会を開くことができるようにして下
さると約束しました。この約束は神権の
力によって一人一人の会員の上に結び
固められました。

結果は本当に驚くべきものでした。8
カ月間も仕事を見つけないことができな
かったある帰還宣教師は、支部長に献
金の額を提示された時には懐疑的でした。
けれども、彼は主に、もし収入があれば
喜んで払います、もし必要とされるの
であればもっと多くの額を払います、と
言いました。その日に交渉した最初の雇
い主は、彼をすぐに本採用とし、彼は
翌日から仕事を始めました。そして2日
後、受け取った賃金の額は大変なもので
した。

店をたたもうとしていたある実業家は、

ふとしたことで製品を改良する方法を思いつきました。彼はさっそくそれに取り組み、間もなく満足のいく製品を作るに至りました。そして以前より高い売り上げ高が記録されたのです。

ある公務員の会員は、どうしたら支部長に提示された額を支払えるだろうと考えていました。導きを求めて祈っていた時に、考えが湧いてきました。「貸金の引き上げを願うことだ。それしかない。」導きがあまりにも鮮烈だったので、彼はその通り実行することにしました。自分の財産からいくら払えるかを計算し、足りない額に見合った引き上げ額を申し出たのです。驚いたことに、その要求は認可されました。さらにそれは過去1年間にさかのぼってなされたので、彼は求められた額を考えていたよりもずっと早く支払うことができたのです。

ある4人の子供の母親は、家族と共に台所のテーブルのまわりにひざまずいて割り当てられた額を払うための助けを祈り求めました。その晩彼女は、隣の婦人から電話を受けました。定期的に小さな子供の世話をしてもらえないだろうかとのことでした。この姉妹は6週間前に子供の世話をさせてくれるように申し出ていたのですが、謝礼が高すぎるという理由で断わられていました。ところがその隣人は、その午後、この姉妹ならだれよりも心のこもった世話をしてくれるだろうということを強く感じたのです。心のこもった世話はお金には代えられないと、その隣人は考えたわけです。

かつて戦争で抑留されたことのある兄弟

は、預金口座からお金を引き出さなければなりません。そのお金は、他の特別な目的のためにとっておいたものでした。ところがその後で、カナダ人のための抑留者年金を受ける資格があることがわかりました。年金はさかのぼって与えられたため、その総額は、彼が建築資金を支払うために引き出した額とほとんど差がありませんでした。

ほかにも同じような経験をした人がたくさんいます。仕事が見つかり、昇進が得られ、表面上価値のないように思われた投資が有益なものとなり、ずっと忘れていた銀行口座が見つかり、中には財産を相続した人もいました。

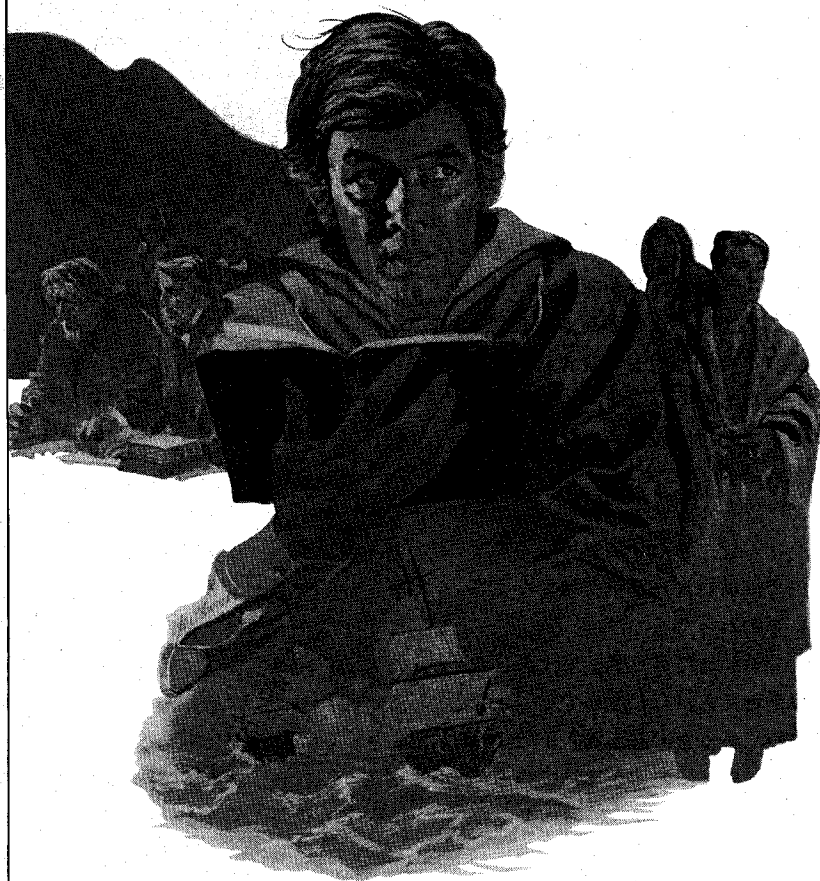
チャレンジが出された2年後には、ステーク部建築資金として80万ドル以上が集まりました。その後3つの礼拝堂が完成し、ふたつが建設中です。また4つが建築を認可されています。これらの建物が完成すれば、ステーク部内の16のワード部と支部が新しい礼拝堂を持つことになるのです。

今、ステーク部全体に「犠牲は天よりの祝福をもたらす」(英文讃美歌147番)という原則が浸透しています。そしてこの特別建築計画は、霊性が高まり改宗者のバプテスマが増えていることで実を結んでいます。1980年7月6日、その設立からたった3年半後に、ステーク部は、オタワオンタリオステーク部とモンリオールケベックマウントローヤルステーク部とに分割され将来の成長と発展のための基をおいたのです。

あるイギリス海軍兵 の冒険

第 I 部

ウィリアム・G・ハートリー



シオンへの夢は彼を戦場、
そして世界一周の旅へと向かわせた。

頃 11月、ウィリアム・ウッドは足取りも重く、霧のかかったイギリスのいなか道を家に向かって歩いていた。まだ十代のこの若者は見習いとして働いていた肉屋を首にされてきたばかりであった。それも良い働き口を見つけないなどとてもできそうにもない時代なのである。彼の心は痛み苦しんでいた、というよりもそれは怒りだったのかも知れない。彼は主人のブラックソールのために一生懸命働いた。それなのに、末日聖徒になったという理由だけで、首にされてしまったのである。このことを聞いたら両親は何と言うだろうか、のろのろと歩きながらそれを考えると気が重くなった。

ウィリアムは1837年に生まれ、両親の手によって生粋の英国国教会の会員に育て上げられた。母親も熱心な会員で、随分と小さな内から彼を幼児学校に入れ、そこで彼は文字の読み書きだけでなく、「全人類のために死んで下さった救い主がおられるということ」を学んだ。また日曜学校に出席する年月の中で、彼自身が言う「神聖な事柄を敬う心」を教わった。

ウィリアムが初めて末日聖徒と出会ったのは、13歳の時であった。使いで父のところへ行く途中、ある家の窓を幾人かの子供たちが物珍らしそうにのぞき込んでいるのを見て、彼もその窓のところに寄ってみた。突然ひとりの紳士に招き入れられて中に入ると、モルモン集会が始まっていた。

彼は昔を思い起こしてこう書いている。



ウィリアム・ウッド

「私はその部屋の隅の方に席を取った。そこはとてもひどい所で、とても神聖な聖餐の儀式を行なうにふさわしい場所とは思えなかった。」しかし聖餐は配られ、讃美歌、説教と続いた。最後の話し手は後に大管長会の一員として仕えたイギリス人の改宗者、チャールズ・ベンローズであった。神会についてのその話は「神に関する私の混乱した考えを完全に覆してしまった。」「その説教がだれかの心に触れたとしたら、それはまさしく私の心にである」と彼は書いている。

こうして、子供の時に聞いた教会の教えに対する疑問は年ごとに深まっていくようだった。15歳の時、彼は親元を離れ、肉屋の見習いになった。彼が初めて下宿した先の主人は独立教会派に行っていて、何とか

してこの若い下宿人の宗旨を変えようとしたが思うようにはならなかった。この時の経験は、ウィリアム自身も認めているように、彼の「宗教上の考えをかなりぐらつかせた」のである。近くの修道院にいつもの肉の配達をする時にも、そこのカトリックの尼僧と宗教について論じ合った。

心を悩ましていたこの頃、彼は親友のジョン・M・ブリッジが末日聖徒になったということを聞いた。当時モルモンは彼が住んでいた「町のすべての善良な人々から良からぬ評判をたてられていて」、ウィリアムはジョンの改宗をひどくたしなめた。しかしある晩のこと、仕事が終わってからジョンはかつての学友に回復された福音の幾つかの原則を説明したのである。ウィリアムはその教えが理にかなったものであるという感じを受け、エセックスのモールドン支部の集会に出てみようかと約束した。そこで耳にした教えと暖かな雰囲気は彼の心に強い印象を与えた。

3週間後、ジョンはモルモニズムについてウィリアムと話し合った。ウィリアムは巡回長老のジョセフ・シルバーとジョン・リンゼーにバプテスマを受けたいと申し出たのである。そして1855年4月の末、モールドンを流れるブラックウォーター川でバプテスマを受け、程なくしてアロン神権の祭司の職に聖任された。

ところがこうして心の安らぎを得た代わりに犠牲が求められたのである。「私がモルモンになったということはたちまち知れ渡り、人々は私を嘲り、ジョー・スミス、ブリガム・ヤングなどと呼び、私だけでなく、ふたりについても悪口雑言を並べ立てた。」

友人、親戚、客、前に通った日曜学校の教師たちは「私が間違っているということをつからせようとしてきた。」1855年は(後に彼の義父となった)サミュエル・ジェントリーという聖任されて間もない祭司に随行し、周辺の村々で公開説教をして回る日が毎日のように続いた。説教を行なったのはジェントリー兄弟で、ウィリアムは祈り手としてそれを助けていたのであるが、彼の親戚は、「あの小さなビリーが説教をする」ということでこれらの集会に来て説教を聞くことも時々あった。親戚の中には人々の前で彼をばかにする者もいたが、そのような仕打ちもウィリアムに「さらに強く真理の原則に付」かせただけであった。

ブラクソール氏とその家族は自分たちが属する教会の日曜日の集いに、何度もウィリアムを連れて同席したこともあったが、やはりこの若い見習いを何とか元の信仰に戻らせようとした。何度もかなりの話し合いをしたが、平行線をたどるだけであった。そして最後に、上得意の客を失うことを恐れ、「モルモン教を捨てるか、それとも他の仕事を見つめるか」のどちらかを迫った。

「だんな様、何としても自分の信仰を捨てることはできません。おいとまをいただきます。」これがウィリアムの答えだった。

職を失い、落胆してはいたものの、この次第をテムズ河口に浮かぶシェピー島のクイズバラに移って間もない両親に説明しなければならなかった。今や彼が一番心に思うことは、英国の多くの改宗者がすでにしているように、シオンへ移り住むことであった。道々彼はユタへ行くための十分なお金を稼ぐにはどうしたらよいかを考え

ていた。

両親の新しい住まいに着いたウィリアムは暖かく迎え入れられた。しかし両親は息子が職を失ったことを聞くと、モルモン教を捨て、ブラックソール氏に赦してもらうようにと説得した。「母はとても悲しんだ」とウィリアムは言っている。彼らは息子の収入の道が絶たれたことを憂い、「私は神のみ手の中にあり、信じている神の戒めに従うなら、仕事も見つかると思う」というその宗教上の楽観論には何の慰めも感じることができなかった。

ウィリアムはきっとかなえられるという信仰を持ち、父親の助けを得ながら仕事を探して島中を歩いた。そしてシェアネスの造船所が戦争特需で活況を呈しているということを知った。当時、イギリス、フランス、トルコなどの連合軍がクリミア半島（黒海をさきみトルコの対岸に位置する）でロシア軍と激しい戦火を交えていたのである。

イギリス軍の部隊と納入契約を結んでいたフィルモアという食肉商は、ウィリアムを若くて腕も未熟だろうと考えていたが、彼が実際に肉を切るところを見て、その気持ちを変え、雇うことにした。給金はと言えば、何とブラックソール氏のところの2倍以上の額であった。それから60年後、ウィリアムはこう書いている。「あの時給金が増えたのは、この教会の教えを否定しなかったこと、またこの山あいの地に何としてみても来たいという決心と祈りに応えて主が下さった祝福であると、今でも信じている。」

後にウィリアムは大きな肉のかたまりを持ち上げようとして背中を痛め、海軍造船所で働くことにしたが、給金は前と同じ額

をもらうことができた。港での仕事は面白かった。そしてそこを利用する多くの船の毎日の出入港の様子を注意して見ていた。ある時、イギリス海軍のユウロタスという名の軍艦が近い内に南太平洋に向けて出航するというのを耳にし、そこですぐにシオンへ行くための計画を立てた。彼はイギリス海軍に志願し、炊事班の乗組員としてユウロタスに配属されたのである。心には、いつの日かカリフォルニアで下船し、そこから陸路をユタに取るということを考えていた。

ところが、スクリー推進船に改造された、24門の大砲を装備するこの旧式フリゲート艦が港を離れるや、彼のその望みはついで去ってしまったのである。突然の集合がかけられ、司令官が極秘命令を乗員に発表した。「全乗組員に告ぐ、本艦はこれよりクリミアの戦地に赴く。」

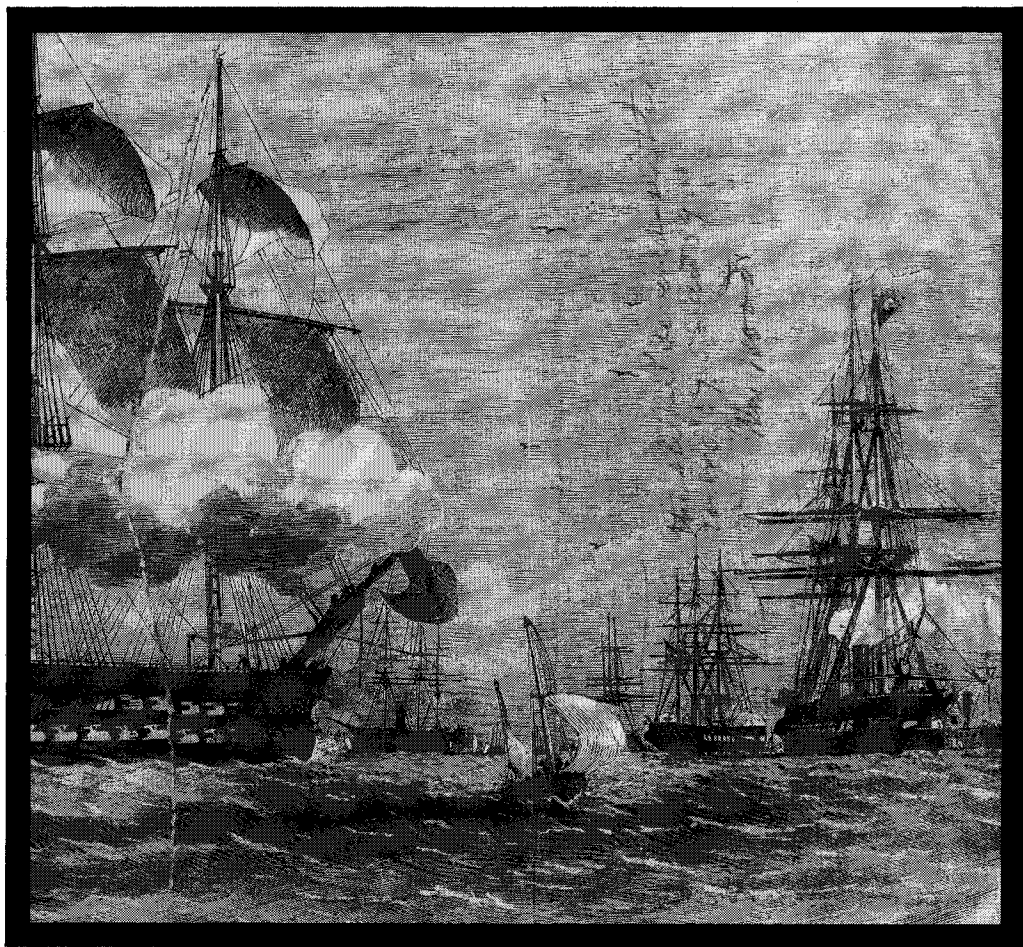
しかし艦を操船する乗組員は定員の半数しかおらず、ウィリアムもわずかな内に、様々な航海技術を身に付けさせられた。彼は後にこう書いている。「私は炊事班員としての仕事をするだけでなく、それを終えると、砲術班の手伝いとして、彼らのすることを何でもさせられたのである。砲兵たちはどんな時でも優れた水兵として働いていた。……それで私は非常に老練な兵の下に水兵としての重要な技術を身につけたが、後になっていつも思い知らされてきたように、それはユタでも役立ってくれたのである。」

リスボン、ジブラルタル、アルジェ、マルタ、コンスタンチノーブルなどの寄港地では、上陸して乗組員用の食肉を調達する

のが常であった。しかしその航海の途中どこに行っても耳にするのは激裂なクリミア戦争の様子であった。

ユウロタスはいったんクリミア半島を離れ、その後セバストポリの近くに停泊した。セバストポリは双方共多大の犠牲者を出し

て戦い、結局イギリスとその同盟軍がロシア軍を駆逐した町である。ウィリアムにとって何よりもうれしかったのは、この戦地に野営するイギリス兵の中にかなりの数の末日聖徒がいて、野戦教会を組織していたことであった。彼は熱心にそこに集った。



やがて戦火も鎮まり、ユウロタスは軍需物資の残りを積み込み、シェアネス目指して帰国の途についた。ウィリアムがあいた時間を見つけて家族のもとに帰ると、家族は皆「私がまだ、彼らに言わせれば怪しげな宗教を後生大事にしていることに驚いていた。」そしてそのことは地元の聖徒たちにとっても驚きであった。それから彼は炊事係、水兵としての腕を高く買われ、また4年間、軍艦リトリビューションに乗船するようにとの任務を受けた。

「私の正式の任務は食肉の係で、小さいが立派な仕事部屋を与えられ、そのすべてを任せられた。その部屋の隅から隅まで、整然とまた清潔に保たれているか、司令官の点検が毎日あった。……私は4年4カ月の多くをこの部屋で過ごした。」

リトリビューションは地中海で、クリミア戦争に用いられた兵器類を積んだり、北極海で消息を絶った艦船の捜索に当たったりしたが、1857年3月、地球を半周して中国に行き、そこで現地のイギリス艦隊に合流せよという命令を与えられた。その途中では、ペルーに寄り、反乱鎮圧を支援することになっていた。

リオデジャネイロで乗組員用の肉、果物などの買い入れを手伝うために下船した時には、自分はブラジルの地を踏んだ最初の末日聖徒のひとりなのだという思いが胸をよぎった。

1858年5月1日、21歳の誕生日、ウィリアムは許可をもらって他の乗組員たちとハワイのホノルルに上陸した。イギリスを出航する前に、ブリガム・ヤング大管長が太平洋の島々に宣教師を派遣したということ

を聞いていたので、聖徒たちに会えればと手を尽くしたが、「彼らについて何の情報も得ることができなかった。」彼は知らなかったが、教会は太平洋地域で働く宣教師たちに、当時ユタに進軍中の合衆国軍からシオンを守るために、できれば帰国するようにと言っていたのである。そして皮肉なことに、ハワイで伝道していた宣教師の最後のひとりが島を後にしたまさしくその日が、ウィリアムがホノルルに上陸した日であった。

教会との何の交わりもない状況の中で、ウィリアムは自分で自分の信仰を養い続けた。乗船する時に持ってきておいた「教会の本」を何度読み返したことであろうか。彼はアロン神権の祭司であったが、「祭司には聖餐の儀式を執行する権能があるということを学んでいた」ので、船内の自分の仕事部屋でひとりで聖餐式を行なってもよいのではないかと考えた。「私は何度も祈り、儀式を行なうことを許して下さるようにと主に請い願った。」と彼は言っている。日曜日、乗組員のための礼拝集会が終わると、ウィリアムは自分の部屋に戻り、「軍用の堅いパンと水をテーブルの上に置き、祈りをささげてから、パンと水を祝福したまえと願い求め、それを口にしたのである。これによって私は多くの霊的な力を得ることができた。」

数週間して香港に着くと、そこではフランス、イギリス軍が中国と戦っていた。リトリビューションはクルーザー、ヒューリアス、リー、ダブの4艦に合流し、何か月にもわたって戦闘を続けた。この艦隊は揚子江をさかのぼり、南京で苛烈な戦闘を行

なった。「相手側の砲がすべて沈黙するまで」南京の町を砲撃し、これによって戦争の終結を1歩進めたのである。その翌日の戦鬪でリトリビューションはかなりの損傷を受けた。砲撃で足を飛ばされ仲間を助けようとしてもうひとりの水兵が片腕を撃ち飛ばされるといふ恐ろしい光景がウィリアムの前で演じられた。リトリビューションは「射程距離内に弾丸を雨あられと浴びせ、24ポンド砲は幾つもの大きな建物を燃え上がらせ、人々は群れをなして逃げまどった。やがて中国政府は降服し、リトリビューションは香港にあるイギリス軍のドックに戻った。

次に来た命令はイギリス政府から日本の大君に贈る特別な帆船を日本まで護送するというものであった。1854年、かの有名なアメリカ海軍提督マシュー・C・ペリーの来訪の結果として、日本は4年ばかり前に開港し、通商条約を結んでいた。ウィリアムはこの地を訪れた最初の末日聖徒と思われる。上陸後の旅は彼の心を躍らせた。日本人は彼の心に強い印象となって残った。

「私は日本人の中に並みはずれた進取の精神を見た。それはかつて出会ったいかなる人々の中にも見たことのないものであった。私は彼らに福音を伝えたいという気持ちを覚えた。」それから何年もの歳月が流れ、ユタの地で七十人の責任を果たしていた時、彼は日本への伝道に召されるようにと何度か祈った。しかし、1901年ヒーバー・J・グラント長老が初めて伝道部を開いた時、その任を受けるには年をとり過ぎていた。

リトリビューションは英国東インド艦隊に編入され、世界をまたにかける巡航を続

けた。セイロン沖合では3カ月をかけて、沈没した郵便船から貨幣、機械などの貴重な物品の引き揚げを行なった。

セイロンを離れて間もなく、リトリビューションは海図にない珊瑚礁にぶつかり、船底を破損してしまつた。その危険な漏れ口をふさぐために、「私たちは船底の穴に防水処理をした大きな帆布を張り」、港に向けて全速で航海した。ところが修理のために船をボンベイのイギリス軍ドックに3カ月間入れていた時、乗組員たちがコレラに感染してしまつた。「私もそれにかかつてしまひ、病院船に収容された。私は主に助けを祈り求めた。」そして回復した彼は他の乗員たちの看護を手伝つた。

修理が済んだリトリビューションの最後の大きな任務はカラチからアデン、すなわちインドから紅海までの電信用海底ケーブルを敷設する2隻の大型蒸気船を援助することであつた。そして1860年10月、帰国命令が下つた。艦は進路を南西に取り再び赤道を越え、喜望峰回りでアフリカ西海岸を北上した。そして、最後の赤道越えをし、3年にわたる世界1周の任務を終えてイギリスのポーツマス港に入ったのは12月20日のことであつた。こうしてこの若いイギリス海軍兵は、世界一周をした最初の末日聖徒のひとりとなつたのである。勇敢な服務ぶりをたたえる勲章をポケットに入れた彼は飛ぶようにして家に帰り、クリスマスの食卓に着いていた家族を驚かせた。

(次号に続く)

ミリアン

ライネ・T・デリック



Richard Ham

エ クアドルの美しい首都キトーで伝道していた時のことです。私はひとりの若い教会員と出会いました。その少女は自らを完全に捧げて同胞を改宗するために働き、人々の模範となりました。彼女の家は貧民街にあるみすぼらしいものでしたが、その心はだれよりも豊かでした。

初めて彼女に会った時のことを、私は忘れることができません。彼女は背が低くて1メートル50センチぐらい、薄茶色の髪の毛が肩までたれて、先が少しカールしていました。しかし、同年代の少女と著しく異なって見えたのは、彼女に歯がなかったことです。年をとった老人であれば少しも不思議はないのですが、ミリアンはまだ19歳だったのです。

「いったいミリアンの歯はどうしたのですか。」私は彼女の家を後にするとすぐ同僚に尋ねました。

「私にもわかりません。ただ、だれもそのことに触れようとしません。」

しばらくの間はそのことが気にかかっていましたが、伝道が忙しくなるにつれてすっかり忘れてしまいました。しかし、最初の訪問から1週間後に、私たちは再びミリアンの家を訪れました。彼女の父親であるサンチェス兄弟は、1年ほど前に亡くなっていました。残された家族は、その後大変な苦労を重ねてきました。サンチェス姉妹は、今では町の向こうまで働きに出なければなりません。しかもそれは、洗たく女という安い賃金で長時間働く仕事です。その結果、ミリアンは学校を止めて、母親が働きに出ている間、家族の面倒を見なければなりません。また、ミリアンの家族には、昔の家を離れて一部屋しかない現在の住居に引っ越さなければならない事情も

ありました。私たちはこの家族の生活状態に無関心ではいられず、定期的に訪問することを約束しました。

その日ミリアンの家には、ローザという教会員ではない友達が来ていました。ミリアンに勧められて、私たちは彼女に少し福音を教えました。しかし、福音に対する関心がないことがすぐに分かりました。それでもあきらめずに、家を訪問して家族の方に福音を伝えてもよいかどうか尋ねました。ローザは私たちの申し出を受け入れてくれました。

次の日、私たちはミリアンの家に寄って、一緒にローザの家へ行って欲しいと頼みました。しかし驚いたことに、ミリアンはいろいろな言い訳を並べて、行くことはできないと答えたのです。私たちは何か隠していることがあると思い、行けない本当の理由を尋ねました。するとミリアンは次のように説明しました。

「ローザの家は、父が死ぬ以前に私たちが住んでいた家の近くにありますが、父が死んでから、近所の人々は母についてひどいわさをするようになりました。ある晩、私はたまたまなくなって、母の名誉を守り、私の知っていることが正しいことを示そうと、外に飛び出して行きました。たちまち私は近所に住む数人の人たちに取り囲まれました。彼らは私をなぐって思い知らせてやれと言いました。そして、みんなが私になぐりかかって来たのです。ほとんどが顔に当たりました。私の歯が1本もないのは、このためなのです。」ミリアンは自分の口を指して言いました。

すべてを話してしまうと、ミリアンはほっとした様子で、もしどうしても行って欲しいのであれば、一緒に行きましようと言

いました。私たちは彼女の勇気に心を打たれ、彼女に行ってもらうことにしました。

約束の夜がやってきました。私は同僚と一緒にサンチェスさんの家へ向かいました。ところが、玄関にサンチェス姉妹がいて、ミリアンに会わせることはできないと言いました。「娘をあんなひどい所へ帰すわけにはいきません。」断固とした口調に、私たちは返す言葉がありませんでした。その時、ミリアンの声が聞こえました。私たちは耳を澄ませました。ミリアンは母親に、宣教師と一緒に行くのには特別な理由があることを証しました。サンチェス姉妹は、何か問題があったらすぐに引き返して来ることを私たちに固く約束させると、しぶしぶ承諾してくれました。

残念なことに、ローザの家族は教会について関心がありませんでした。帰る途中で、ミリアンは近所に住んでいる家族のことを思い出して話し始めました。その家族の男性と以前にデートをしたことがあったのですが、好ましくない習慣を持つ非常に俗的な人だったので、それきりになっていると言うのです。私はみたまを感じて、その人の家に案内して欲しいと頼みました。ミリアンはひどくためらっていましたが、そのルイズという人が両親や息子と共に住んでいる家に連れて行ってくれました。玄関に現われたルイズは私たちを見て大変驚いた様子でした。しかし、私たちを家に招き入れると、福音のメッセージを熱心に聞いてくれました。そして、決められたレッスンが終わった後で、こう言いました。「最近私は神様の本当の教会に入りたいと思うようになりました。でも、どれが本当の教会なのか、どうしたらそれを見分けることができるのか、私には分かりませんでした。」彼

はすでに悔い改めという第一段階を踏んでいましたが、何かもっと必要なものがあると感じていたのです。彼の心は、私たちが主の真の教会の代表者であることを理解していました。彼ははっきりとそう言いました。それから1週間後に、ルイズはバプテスマを受けました。

私たちはミリアンとルイズの助けを得て、この地域で6週間の内に25名近くの人にバプテスマを施しました。私は、以前にひどくミリアンを苦しめた人々と話す決意をした時のことを忘れることができません。ミリアンは互いの中に何事もなかったかのように、教えるのを助けてくれました。そして、数家族が福音に改宗しました。

主に対する深い信仰と主のみ守りにより、ミリアンは同胞に対する恐れを克服し、彼女の命をおびやかした人々に福音を教える手助けをしたのです。今ではその中の多くの人々が、自分たちの罪を赦し、イエス・キリストの福音を伝えてくれたミリアンを敬い、その名をほめたたえています。

編集部注：

ミリアンはこの出来事があってから間もなく、虫垂破裂による合併症を引き起こして亡くなった。しかし、会員宣教師として偉大な業績を残し、私たちが従うべき大いなる模範を示したのである。

バスに乗って

オービッド・
ゾリンガー



それは、心を空想の中に包みこみ、仕事や勉強をしようという考えを押しのけてしまうような、やさしく、ものうい、そんなある暑い夏の日の午後だった。私がかつて伝道に出ていた時は、こういう日は、気持ちを伝道に向けることが一番困難だった。今は学校について同じことが言えた。昼前から私は、根の標本を採集するために、

キャンパスの東にある丘に登っていた。研究室の同僚と私は、植物学の研究課題のために根を集めていたのである。その日は、採集が終わってからチョウを追いかけてたりして遊んでいたもので、当然かかるであろう時間の2倍もの時間がかかってしまった。採集を終えてしまった後で、同僚は車で私を下までおろしてくれて、それから私はバ

スに乗った。金曜日の午後で、初夏の穏やかな空気が私の心を満たす。私はバスに乗っている間中、あしたの土曜日は、日のさんさんと照る浜辺で冷たい水につかりながら過ごそうと考えていた。

私が、その日のことをもう少し細かくすみずみまで想像し始めようとした時、エア・ブレーキが親しげにシューッと音を立てて、小さな少年がバスの前方から乗って来たのに気づいた。バスは半分ほど人が詰まっていた。バスの前方と私の席の間にはいくつか空席があったので、私はほとんど注意を払わなかった。窓の外に目を戻しながら、私は再び心を空想の週末へと漂わせた。

しかし、空想の中に戻ろうとしたまさにその時、私は目の片隅に先程のあの少年をとらえたのである。彼は空席をふたつ通り過ぎて、まっすぐに私の隣の席をわざわざ進んで来るようだった。9歳か10歳位だろうか。色あせてはいるがこざっぱりしたジーンズと赤いチェックのシャツを着ていた。シャツは少し大きすぎるようだった。たぶんおさがりなのだろう。彼が近づいて来たので、私は、彼が私の席を通り過ぎて後ろの方の空席のどれかにすわれば良いのと思いつつ、断固として窓の外を見つめた。しかし、彼はそうしなかった。

「こんにちは、おじさん。」彼はそう言っていて、ぼんと私の隣に腰かけた。彼のほほえみは、顔の割には半分位大きすぎるように見えた。私は、ほほえみ返したくなかったが、彼のニコニコ顔には伝染性があったので、ほほえまずにはいられなかった。

「こんにちは」と私は厳然たる落ち着き

を取り戻そうとしながら答えた。

「いいお天気ですね」と彼は言った。

「そうだね。」私は答えた。「良い日だね。」今度はどうにか笑わないようにして、私は、これで会話が終われば良いのに、と思いつつ再び窓の外に目をやった。その日はあまりにも空想するのにふさわしい日だったので、小さな子供と天気の話をして過ごすのがもったいなく思えたのだった。少しの間沈黙があり、私は再びくつろいだ気分になって、浜辺でバレーボールをしている様子を想像し始めた。

「あの、おじさん、あなたは結婚していますか？」

「何だって？」私は少年の方へ意識を戻らせながら尋ねた。彼のほほえみは、以前よりもわずかながら大きくなったようにさえ思えた。

「結婚していますか？」

「いや。」私は、彼が私の気持ちに感づいてくれればよいと思いつつ冷たく答えた。

「ああ」と言って彼はがっかりして下を向き、ほほえみは消えていった。彼は一瞬、面食らったようだった。彼は考えていた。それからすぐにまた顔を上げたのだが、その目は以前にも増して輝いていた。

「でも、あなたは結婚するつもりでしょう？」

私は、ほほえむつもりはなかったのだが、彼の目と白く輝く歯を見ていると、ほほえまずにはいられなかった。

「そうだね。するだろうと思うよ。」

「で、結婚する時にはあなたは奥さんを愛するでしょう？」今度は私が面食らう番

だった。その質問はこのような幼い子供がするには場違いだからだ。どうやら彼は話を何かに導いているらしいのだが、私にはそれが何なのかははっきりとはわからなかった。

「もちろん」と私は用心深く答えた。「もちろん、そうするだろうね。」

「で、あなたがだれかを愛したら、いつもその人たちと一緒にいたいと思いませんか。死んだ後でも。」

わかった！彼は私に、「黄金の質問」をしていたのだ。彼はモルモンだったのだ。私は彼を見つめてじっとすわっていた。私は答えなかった。何と言って良いかわからなかったのだ。私は何回これと同じような質問をして来ただろう。伝道に出ている間、ブラジルの通りやバスの中で。しかし、あれは伝道の時だった。それはその時で、今ではなかった。同じ言葉を今ここで、故郷で、10歳の少年の口から聞くとは思ってもよらないことだった。バスは急にスピードを落とし、少年は立ち上がりポケットから何かをとり出して私に渡した。

「あの、おじさん、ぼくはここで降りなければなりません。これをどうぞ。ここにぼくのふたりの友達の名前が書いてあります。もしあなたが、もっと知りたいと思うなら彼らに電話して下さい。さようなら、おじさん。」そして彼は行ってしまった。

私は彼にもらったパンフレットをじっと見つめてすわっていた。それは半分に折りたたんであり、端が少し破れていた。私はそれを開いて題を読んだ。「救いの計画」。

私は、2年ほど前に伝道から帰って来た。私は家に伝道日記とカラースライドとおみ

やげとたくさんのおもいでを持って帰った。しかし、私は「伝道」という大切なものを置いて来てしまったのだった。我が家にいる間に何人の人に教会について話しただろう。「黄金の質問」を何回しただろう。ただ話題を持ち出しさえすれば興味を持ったかもしれない人が何人いただろう。私は、今まさに、私の伝道期間すべての間に学び得なかった、宣教師についての教訓を学んだのだった。そしてそれは、証とほほえみ以外何も持っていない幼い少年によって教えられたのである。

今やバスは満員になっていた。もう町の中心地近くまで来ていて、もうすぐ5時だった。背広を来た若い男が私の隣にすわった。人前を気にして私はシャツのポケットにパンフレットを詰めこみ、足もとを見つめた。私は先程の少年についてまだ考えていた。彼は若かったけれど、私がかつてそうであったよりもはるかに宣教師らしかった。私は再びさっと上を向いた。隣にすわった男は窓の外を見ていた。たぶん空想にふけているのだろう。

「結構な日じゃありませんか。」私は考えずに言った。

「ええ。」と彼はほほえみ返し、「とてもきれいな夕焼けですね」と言った。

私はしばらくポケットの中のパンフレットを指でさわりながらじっとしていた。それからできる限り大きくほほえんで尋ねた。

「あなたは結婚していらっしゃるでしょうか？」

夜明け

七十人第一定員会会員

ローレン・C・ダン

私は走るのが好きです。

最近の召しでニュージーランドに滞在していた時も、毎朝早く、私はオークランドのアーニーロードにある自宅を出て幾つかの通りを走るのを日課としていました。時にはリムエラやワンツリーヒルにも足を伸ばしました。ニュージーランドの早朝ランナーには、たくさんの楽しみがあるのです。自然の美しさも格別ですが、これほど素晴らしい眺めの日の出が見られる国も珍しいでしょう。たなびく雲が朝日を受けて空が赤く染まる朝もあれば、和らかなくすんだ色の朝もあります。しかし、それ以外の朝は決まってうっとりしい雨模様です。ですから、日の出が人々に何をもたらすかは一口に言い表わせません。素晴らしい夜明けになりそうな空が、にわかにかき曇り、一変して暗やみの中の雨になる時もあります。かと思うと、一瞬のうちに太陽が雲間から現われて、壮観な夜明けが広がる時もあります。毎日違います。夜明けはそれ自体、神秘と驚異のベール包まれているのです。

人生もこれと同じです。本当のところ、日々何が待ち設けているか私たちにはわかりません。私たちは一日一日を、来るままに受け止めなければならないのです。

イエス・キリストの福音は、毎日をどんよりした曇り空からぱっと明るい空へと奇跡的に変えるためにあるではありません。イエス・キリストの福音は、良い日には感謝の念を持って臨み、また悪い日には信仰

と決意とを持って、「新しい夜明け」が慰安を与えてくれるまで対処することのできる内なる光、強さを私たちに与えるためにあるのです。

「……すべて神に頼る者は、苦しみ悩み禍に逢う時に助けられてこれらを忍ぶことができ、また終りの日に高く挙げられる。これを私は確に知っている。」(アルマ36:3)

何年か前になりますが、私たち家族がボストンに住んでいた時のことです。何ともいやな一週間を過ごしたばかりでした。いやな一週間と言えばどのようなものか、おわかりいただけるでしょう。7日間、来る日も来る日も連続しておもしろくないことが起こったのです。その週の終わり頃には、私はすっかり気がふさいで、少し気落ちしていました。

それでとうとうある夜、家族が寝静まってから、私はこのまま起きていて、いつもの朝晩の祈りの時以上に強く決意して本当に主のみもとに近づこうと決心しました。

明かりの消えた家の階下の書齋にひざまずくと、心からへりくだって主に祈ろうという気持ちになりました。そして、私は心の奥底から自分の気持ちを率直に打ち明けました。祈りながら、私は主がここにおられ、気づかっていて下さるという確信を得る必要があると感じました。過去の経験からわかっていたはいましたが、それでも再確認を必要とする時があるものです。祈りの中で、私はそのことを願いました。その結果、

非常に珍しい経験をしたのです。それまでも靈的な経験をしたことはありました。しかし、この時の経験ほど私にとって靈的なものはありませんでした。みたまの現われが非常に現実のものであったので、私ははっきりと感ずることができたのです。私は全身がみたまに満たされるのを覚えました。それもただの一度ではなく、ほんの1、2分の間に何度か味わったのです。

その夜、私はみたまによって生まれ、救い主は生きておられるだけではない、私のことを知り、真実の神の愛をもって私を心に懸けていて下さるのだという一層強い、確固たる知識を得て、書斎を出たのでした。

この経験はその後何日にもわたって私に影響を及ぼしました。そのため、私は自分の同胞に対して、たとえ道行く見知らぬ人々に対してでさえ、心から気づかい愛する気持ちを抱いたのでした。以前ならほとんど関心がないか、まるで関心がなくて通り過ぎたでしょうが、その時は心配し関心を持ったのです。自分の家族でさえ一段と愛おしいように思えました。私はどこの国の聖徒たちとも絆を感じ、同胞に仕えたいと思いました。

その時、自分がどんな試練に直面してい

たのかは覚えていません。例にもれず、その時の試練も過ぎ去ってしまったのです。しかし、聖霊によって癒されたあの夜の経験だけはいつまでも忘れないでしょう。聖霊は私にこのことを再び確認してくれました。それは、私たちの心が正しければ私たちは主のみ前に行くことができ、程度の差や方法の違いこそあれ主は聖霊を送り癒して下さるということ、また聖霊は癒すだけでなく、私たちと主を結びつけて下さるということです。不思議な経験はしなくても、日常の経験からこの確認は得られます。

人生の新しい一日が始まる度に、意義ある祈りと戒めを守ることによって自らを備えることができますように。このようにして聖霊の光は私たちの内から輝きいで、私たちを励ますのです。聖霊の光は、行く手に何かがあるかを最もよく教えてくれます。また私たちが変えることのできる点、あるいは変えるべき点を変えるように導いてくれます。さらには、どうにもできない経験に遭っても堅く信仰を保てるように助けてくれるのです。

「主なる神は日です、盾です。主は恵みと誉とを与え、直く歩む者に良い物を拒まれることはありません。」(詩篇84:11)





小さなお友だちへ



へ。ルシャの市場は、色とりどりのテントといい、にぎわいといい、まるでサーカスのようでした。

ジョナス・ハンウェイはイギリスの商人で、ペルシャに毛織物を買いにやってきました。ところが王家のパレードが行なわれるということで、取り引きも何もできなくなっていました。

「王子様のお通りだ、道をあけろ。」
お役人がこう命令しました。

王子様の行列が近づくと、人々は頭を深くさげました。これがその国のならわしなのです。でもジョナスはそうしませんでした。一体何があるのだろう、よく見てやろうと思ったのです。4人の強そうな男が、たれ布でかざられた王子様のかごをかついでいました。もうひとりのひとが王子様の頭に日よけのようなものをかざしています。

「なるほど、あれはいい。」ジョナ

スは思わず叫びました。やがて、それがかさと言われるものであることがわかりました。

ペルシャの人々がみんな自分のかさを持っていたら便利だろうな、ジョナスは思いました。

しばらくするとジョナスは、日の光をさえぎるために、だれでも使えるかさをたくさん作りました。ところが、それを聞いた王子様はジョナスをお城によびつけました。

「かさ作りをやめよ。」王子様は命令しました。「ペルシャでかさを使ってもよいのは王子と王だけである。かさは王家のしるしなのだ。」

王子様はあらあらしく言いました。「これはペルシャのならわしだ。さっさとかさを持って自分の国に帰るがよい。」

ジョナスはイギリスに帰ると、かさを屋根うらにしまい、あまりのいそがしさに、いつしか王子様のことを忘れてしまいました。

ある日、ジョナスが出かけようすると雨がふってきました。屋根つきのかごか馬車にのろうとしたのですが、あいているのは一台もありません。

そのころは、旅をするのに西洋か

ごという屋根つきのいすを使うのがふつうでした。ふたり、あるいは4人でそのかごを運びます。雨がふると人々はぬれないように、われさきにとこのかごにのろうとしますのです。

かごにのった人々を見てみると、ジョナスはペルシャの王子様のことを思い出しました。

そうだ、かさが日よけになるなら、雨だってふせげるはずだ。ジョナスは思いました。

そこで、かさを引っぱり出すと、それをさして町に出て行きました。

「見て、変な人がいるよ。」通りすがりの子供たちが口ぐちに言いました。そのころ、イギリス人はかさというものを見たことがなかったのです。

ジョナスは雨がふるたびにかさを持ち歩きました。友達にもあげました。

かご屋たちはそんなジョナスにはらをたてましたが、人々はジョナス・ハンウェイのこの新しい考えが気に入ったようでした。こうしておおぜいのイギリス人がかさを持ち歩くようになったのは、それから間もなくのことでした。この考えはやがて世界中に広まり、雨がふった時の大の仲よしとして、かさを知らない人はいなくらいです。

「ハンナ、来てちょうだい。」

柳の茂みの中の小屋で遊んでいると、母さんの呼ぶ声がしました。

「何かしら？」ハンナは人形をしまつて、すぐ家に帰りました。

「まあ、早いこと。」母さんはうれしそうに、にっこりして言いました。「母さん、これから急いでハンセン姉妹の家に行かなきゃならないの。それでハンナに、夕食に使うじ

ゃがいもを穴蔵から出しておいてほしいの。」

「でも、母さん！」ハンナは身ぶるいがしました。「穴蔵にはクモがいっぱいいるし、それにきょうはガマが出てくるのを見たわ。わたし、行きたくない。」

すると母さんは言いました。「だれだって、いやなことでもしなければならぬ時があるものなのよ。サ



あな
穴ぐらの
中で
なか

アイリス・シンダーガート

ミーをつれて行くといいわ。」

「ぼく、行くよ。」 気立てのいい弟のサミーは、「ぼく、何もこわくないんだ」と、いかにも勇敢そうな口ぶりです。

ところが、母さんが出かけてしまうと、サミーは行くのはいやだと言いました。

「いっしょに来ないのなら、母さんに言いつけるから。」

けれども、サミーはズボンのポケットに手をつこんだまま、動こうとしません。ハンナはサミーをじろっとにらみつけると、勇ましく、家の裏にある穴蔵の方へ行きました。そして、入口のとびらを持ちあげましたが、すぐに閉じてしまいました。でこぼこの階段を見ただけで、ハンナはぞっとしたのです。クモの巣のはった、うす暗い穴は、それだけでも気味が悪いものです。

ハンナは、引き返そうと思いました。でも、お手伝いはしなくてはなりません。

ハンナがうしろをふり向くと、サミーが来ていました。「サミー、先に行きなさい。」

「いやだよ！」 サミーはがんとして言います。

「なによ、弱虫！」

「ぼく、弱虫じゃないよ！ ガマもクモもこわくないもん。」 そう言うや、サミーは身をかがめてとびらをぱっとあけ、中に入って行きました。

ハンナも、とびらを手で支えながら、後ろ向きにおり始めました。それを見て、サミーはからかいます。

「ハンナの弱虫！」

ハンナはおこって、サミーの方をふり向きました。ところが、ふり向きざまに手をはなしてしまったのです。とびらがボタンとしまると同時に、ハンナは階段の下にたたき落とされてしまいました。

「ハンナ、どうしたの？」 でもハンナは、上から落ちてくる土の雨にびっくりして、声が出ませんでした。

天井がくずれている！ とびらがしまったショックで、支柱がぐらついたにちがいがありません。

「ハンナ、助けて！ 土にうまっちゃうよ！」 すぐそばでサミーの声がしました。

「今行くわ、サミー。」 暗やみの中、ハンナは手探りで入口を見つけようとしたのですが、手にふれるのは湿った土ばかりでした。入口がふさ

がれてしまったのです。ふたりは穴蔵にとじこめられてしまいました。

サミーは泣きじゃくっています。でも、「私は泣いちゃいけない」とハンナは思いました。そして、サミーをだきしめて言いました。「サミー、泣がないで。ふたりでいっしょにお祈りしましょう。」

目をとじると、ハンナは祈りました。「天のお父さま、どうかサミーと私を助けてください。穴蔵にとじこめられました。家にはだれもいません。どうかここから出られるように助けてください。」

話すとのどが痛みます。穴蔵の中の空気がなくなってきたのです。

もうガマヤクモを気にしている暇はありません。ハンナは板切れを見つけると、サミーに言いました。

「サミー、手伝って。急いで天井に穴をあけるのよ。」

ふたりは板切れを持って、息を切らしながら、何度も何度も頭上の土をくずしました。

そして、サミーが、「ぼく、もうへとへとだよ」と言ったその時です。板を持った手が急に軽くなりました。とうとう穴をあけたのです！

ハンナはほっと一息つきました。

その時です。ドシン、ドシンと打つ音が聞こえてきました。そのたびに周囲の土が振動します。「だれか外にいる。でも、母さんじゃないわ。こんなに早く帰ってくるはずがないもの。」

突然、入口の方から男の人の声がしました。「だれかいるかい？」

「はい、います。」

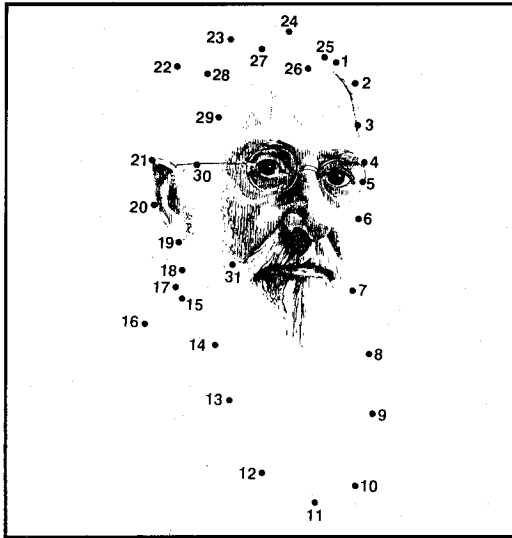
「大丈夫か？ 今すぐ出してあげるからね。」 カード兄弟でした。

こうしてふたりは、土の中にあけた小さな穴から助け出されたのです。

サミーは帰って来たお父さんにこう言いました。「父さん、ハンナが助けてくれたんだよ。ふたりで穴をあけたんだ。」

「それを私が見たっていうわけさ。実に不思議なんだがね。」 カード兄弟は言いました。「今まで君の土地は一度も通ったことがなかった。きょうの午後にもそのつもりはなかったのだ。ところがどういうわけか、足がこっちの方に向いてね。きっと主がお導きくださったのだね。」

「カード兄弟、私たちがそう思うわ。」 ハンナとサミーは、顔を見合わせてにっこりしました。



ジョセフ・F・スミス大管長が生まれてまもなくのころです。何

人かの男たちが、とつぜん家の中におし入ってきました。ちょうど、お母さんが病気でねていて、お父さんは牢ごくに入れられている時でした。男たちは、赤んぼうのジョセフがねむっていることにも気づかずに、部屋の中をあらし始めました。かわいそうに、ジョセフはすっかり毛布やシーツの下にうまってしまいました。

やがて男たちが出ていくと、お母さんのメアリーはジョセフがいないことに気づきました。そこで、おばさんのマーシーといっしょに家中をさがして、毛布やシーツの下じきになって死にそうになっているジョセフを見つけました。しかしさいわい

なことに、お母さんたちのけんめいな手当てによってジョセフはふたたび息をふき返しました。

少年時代のジョセフ・F・スミスをおそったさいなんは、こればかりではありません。ジョセフが6さいの誕生日をむかえる少し前、父のハイラムと予言者ジョセフがカーセージの牢ごくでころされました。ふたりがころされた後、聖徒たちは西部へ旅立ちました。1848年のま夏、当時10さいにもならなかったジョセフは、4頭だての牛車を駆って、ウインタークォーターズからソルトレークまで1600キロの道のりを旅しました。この旅は、家族にとって苦しみの連続でした。お母さんが、だれの助けも借りないで旅をすることにしたからです。それでも、ジョセフたちはソルトレークに一番のりしました。

ジョセフがお母さんをなくしたのは14さいの時です。後に、ジョセフは人生をふり返って、「私の人生で心のよりどころとなり、すべての戒めに従う力を与えてくれたのは、母の愛です」と語っています。

15さいになる頃、ジョセフはもうふつうの大人が経験することをほとんど経験していました。ジョセフは

ハワイへの伝道にも行きましたし、イギリスへも宣教師として行きました。そして、ヨーロッパの伝道部長の召しも受けたのです。27さいでジョセフは使徒に聖任され、1901年には大管長に召されました。

オランダに、ジョン・ルオソフという名の少年が住んでいました。この少年は、目が見えませんでした。ある時、スミス大管長がオランダにおいてになることを聞いたジョンは、お母さんにこう言いました。「予言者にはどんな宣教師よりも大きな力があるんでしょう。ほくを予言者の

ところへ連れて行って、予言者に多くの目をのぞきこんでもらえないがしら。そうしたら、ぼくの目はきつとよくなるよ。」

スミス大管長は、集会が終わるとジョンの目をおおっていたほうたいを取りました。そして、ジョンの目をのぞきこみ、祝福し、目が見えるようになると約束しました。こうして、ジョンは家へ帰りました。そして、ほうたいを取ると、ジョンは大声でさげびました。「お母さん、目がよくなった。もういたくない。何でもよく見えるよ。」

モルモン経クイズ

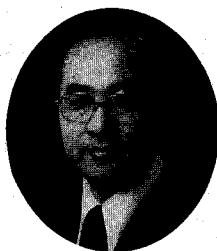
1～15のそれぞれの人物と関係するものを選んで下さい。

- | | |
|-----------|-----------------------|
| 1. アルマ | a. 正しい王様 |
| 2. リーハイ | b. 悪魔の手下 |
| 3. ノア | c. 2000人の若者の先頭になって戦った |
| 4. レミュエル | d. 最後のニーファイ人 |
| 5. ヒラマン | e. ジエレドの民の指導者 |
| 6. サミュエル | f. ニーファイ人とレーマン人の父親 |
| 7. レーバン | g. 真鍮版を持っていた |
| 8. ベンジャミン | h. ニーファイ人の予言者 |
| 9. レーマン | i. レーマン人の王様 |
| 10. モロナイ | j. すばらしい宣教師 |
| 11. ラモーナイ | k. レーマン人の指導者 |
| 12. サライア | l. モルモン経をまとめた人 |
| 13. モルモン | m. リーハイ |
| 14. ジエレド | n. ニーファイ人とレーマン人の母親 |
| 15. アピナダイ | o. レーマン人の予言者 |

再奉獻の祈り

1981年9月1日(火)

—横浜の地にて—



日本・韓国地域代表役員

菊地良彦

このお祈りは80年前、横浜の森において捧げられたヒーバー・J・グラント長老の奉獻の祈りを記念するため、なされたものである。なお、お祈りは20分以上にわたっているがスペースの関係で一部省略の形にしたのでご了承いただきたい。

永遠の父なる神様、私たちは今、あなたの御子の証人であるヒーバー・J・グラント長老が80年前、日本の地を奉獻して下さった時の場所に集っております。私たち、また先祖に「永遠の真理と光」そして「永遠の生命の道」を与えて下さいましたことを心から深く感謝申し上げます。この回復された「偉大な真理」と「栄光の道」を今、私たちが歩むことができますことを感謝申し上げます。

偉大なあなたの僕であるジョセフ・スミスの大いなる犠牲とさらには開拓者の犠牲を通して、今、私たちは「真理」と「喜び」をかみしめながら、日々生活できていますことを心から感謝申し上げます。あなたの御子イエス・キリスト様の美しい愛と犠牲、そしてあなたの深い御慈悲に心から感謝申し上げます。私たちに「命」を与えて下さり、この緑あふれる日本の地に「生命の水」を与えて下さり、永遠の幸せを享受できますことを心から感謝申し上げます。

この日本の地があなたの「みたま」によって祝福され、人々の生活がうるおされ、教育を受け、平安な生活を送れますことを心から感謝申し上げます。この世に私たちを送って下さり、私たちの生命をお守り下さっていることを感謝申し上げます。今、たくさんの回復されたメッセージを伝える宣教師をこの「日いずる国」日本にお送り下さっていますことを感謝申し上げます。

1901年9月1日に、あなた様は、ヒーバー・J・グラント長老の「聖なる祈り」をお聴き下さいました。その80年後の今、私たちは愛する日本の指導者と共に、ヒーバー・J・グラント長老が奉獻したこの地に

ぬかづき、あなたの御前に頭を垂れ、私たちの心からの祈りをお捧げします。

神よ、願わくは、我々の願いを聞きとどけたまえ！ 我々の感謝の気持ち、希望、夢、霊の喜びそして魂の叫びをどうぞ聞きとどけたまえ！ 私たちはあなたから数え切れない恵みをいただいています。

どうか、この日本の民を、山々を、丘や谷、緑の木々と大きな流れ、小川、海辺、すべて作物のなる農地を、そして日本の津津浦々までも祝福したまえ。あなたの「聖いみたま」を朝露のごとく、また、清い風のごとく注ぎ、この日本の地を清めたまえ。

特に宣教師の働いている多くの地を祝福したまえ。宣教師たちの上にあなたからあふるる祝福と恵みが注がれ、彼らが心の清い人々を見いだすことができるように、また、日本人の一人一人をみたまの力によって清め、祝福したまえ。日本の人々が、この回復された真理を心から受けることができますように、その備えの道を与えたまえ。

我々のワード部、支部、ステーキ部、伝道部の建物を清め祝福したまえ。それらにあなたの聖きみたまが豊かに注がれて栄光の顕われる場所となさしめたまえ。

あなたの尊い御子が、枕しお休みになられる東京神殿を私たちはいただいて心から深く感謝申し上げます。願わくは、私たちが身も心も清め、あなたとの交わりを一層深めることのできる聖所として保つことができますよう祝福したまえ。そして多くの聖徒たちがその宮居に詣でることができるようにその聖なる場所を祝福したまえ。私たちの家庭を、家族一人一人を清め、祝福したまえ。ここに列席の伝道部長御夫妻一

人一人の上に、あなた様の特別なご慈悲が
あって彼らが、あなたの「み栄え」を顕わ
すべく、一生懸命、宣教師や聖徒らを鼓舞
することができるように、彼らに特別な「み
たま」を注ぎたまえ。また地区代表、ステ
ーキ部長そしてすべての教会指導者の上に
あなたの特別な祝福がもたらされ、その一
人一人に靈性と指導性を与えたまえ。

天の父なる神様、私たちの罪をどうぞお
赦して下さい。私たちの嫉妬の心、私たちが
人を羨む気持ち、そして人を批判する気持
ち、私たちの魂に内在するバビロンをどう
ぞ取り除きたまえ。今日をもって、私たち
は「神権の力」によって、あなたを信じ、
お慕い申し上げる「純粋な愛の気持ち」を
通じ、それらの悪の靈のバビロンを明白に
取り去ることができるように、私たちに勇
気を与えたまえ。この日本の津々浦々にあ
なたの聖なるみ名と聖いみたまをあふれる
ばかりに注ぎたまえ。

あなたは、いにしえのモルモン経の予言
者を通して、この地をかんらん樹木園の
一番端に植えられた木の枝の一本にたとえ
られました。あなたの僕、ジョセフ・フィ
ールド・スミスを通してそのことを
知らせて下さいました。また、あなたの僕、
ゴードン・B・ヒンクレーを通して、「こ
れはまさしく日の出ずる国、教会の出ずる
国」と告げられました。さらにハロルド・
B・リーを通して、第二次世界大戦は、日
本の民がこの回復された福音を心から受け
入れるその準備の時であったと言われまし
た。そして、マシュー・カウリーを通して、
あなたはこの地を清め、祝福して下さいま
した。日本の津々浦々に神の王国、シオン

のステーキ部が広まり、「神殿がいくつか
建てられる」と宣言されました。また、ヒ
ュー・B・ブラウンを通して日本の兄弟姉
妹たちは、中国やロシアなど、世界の国々
に福音を携えていき、伝道をするであらう
と、そして、この地から教会の指導者がた
くさん生まれるであらうとも予言されまし
た。こうして、あなたの聖なる僕であるこ
れらの多くの予言者たちは、たくさんのこ
とを日本のために予言されました。

天の父なる神様、私たちのこの日本の何
百、何千万という人々があなたの教会に、
あなたの道に群れを成して入るように祝福
したまえ。あなたの子供たちが、靈の暗黒
の長旅を終えて魂の故郷につき、旅の傷や
疲れをいやすべく暖かく迎え入れられます
よう教会を清めたまえ。旅人が暖かい、キ
リストの愛とその喜びのおとずれにより休
む寝床が与えられ、食物やねぎらいの言葉、
平安な心、そして、永遠の旅路を歩む勇気
と靈感が与えられるところとして日本の教
会を祝福したまえ。

新しい教会員一人一人の魂の中にイスラ
エルの血氣と靈氣が脈々と流れるように祝
福したまえ。そして私たちのすべての心が
天上にうつるように、特別に心から清めた
まえ。

ここに日本伝道80周年を迎えることがで
きましたことを感謝申し上げます。これら
の聖なる祈りを、ここに集いました私の永
遠の友である兄弟姉妹、ならびに私の魂の
兄弟姉妹の祈りと共にイエス・キリストの
み名によってあなたの御前にお捧げいたし
ます。アーメン。

(一部省略)

1981年を飾る

日本伝道80周年



▼一斉にスタート(マラソン大会)



▲つわもの、勢揃い

| 時 | 催し物 | 内 容 |
|-----------|---------------------------------------|--|
| 2/11-2/13 | ホワイトコンファレンス (岐阜県・流葉スキー場) | ◎スキー講習会、雪上運動会、ダンスパーティー、証会など多彩なプログラムを通しての親睦の集い。 |
| 2/21 | モルモンマラソン大会 (福岡県・志賀島) | ◎福岡県志賀島をレース会場に、昨年に引き続いての2度目の大会。各種目(20, 10, 2キロレース)に好記録続出の盛況。 |
| 2/27-2/28 | L D S 武道大会 (広島県立体育館) | ◎剣道愛好家の競技大会。7段という高段者をはじめ、学生時代の経験者や初心者など、パラエティーに富んだ出場選手による熱戦。 |
| 2/28-2/30 | スカーレット祭 (大阪・万博記念迎賓館) | ◎ディナー、ダンスパーティー、テートなどを通して「永遠の伴侶」を見つけようという、かつてないユニークな催し。 |
| 2/4-2/5 | 全日本L D S卓球選手権大会 (名古屋市市民体育館) | ◎男女各シングル、混合ダブルスの3種目の競技に、全国より腕に自信の兄弟姉妹がその覇権を争う。 |
| 2/11-2/13 | 全日本L D Sジャンボリー大会 (神奈川県・座間キャンパスその他) | ◎カブ、ボーイ両スカウトの活動の充実とアロン神権組織の強化が大きな目的。交歓食事会、ハイキング、キャンプファイヤーなど。 |
| 2/5-2/8 | 九州地区S A P大会 (大分県・城島高原) | ◎広大な自然をバックにしての若人の祭典。(参加者300人) |
| 2/5-2/8 | 北海道地区S A P大会 (北海道・旭川) | ◎旭川を主会場に繰り広げられた若人の集い。参加者は夏の北海道の空気を満喫。 |
| 2/6-2/30 | 全国指導者訓練プログラム | ◎日本全国8カ所において行なわれる。アメリカより中央管理会のメンバーを招いての指導者訓練活動。 |
| 2/1 | 日本の地、再奉獻の祈禱会 (横浜市) | ◎日本の教会指導者が横浜の森(1901年9月1日、ヒーバー・J・グラント長老によって奉獻されたと思われる場所)に一堂に会す。 |
| 2/10 | 全国L D S音楽祭 (大阪・タテキ部センター) | ◎全国的レベルでの音楽コンテスト。ポピュラー、合唱などの発表。(テレビ関係者も招待の予定) |
| 2/13 | シボルティジョン'81 (日本東京ステキ部センター) | ◎種目は英語と日本語。それぞれに団体と個人戦があり、弁舌の技を競い合う。 |
| 2/21-2/23 | 全国L D Sろうあ者大会 (横浜ワード部) | ◎国際障害者年にちなんでの集い。神殿の参入、手話劇の発表、証会、ホームステイによる交流などが計画されている。 |

記念行事・特集

LDS ジャンボリー



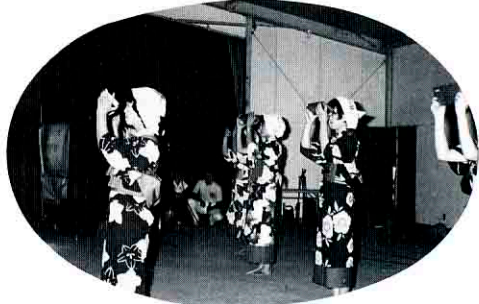
▲白熱の卓球試合



指導者訓練プログラムの一コマ



若さあふれる面々(北海道SAP大会)



▲文化活動(九州SAP大会)



再奉獻の祈禱会に集まった兄弟姉妹たち

木口聖徒イエスキリスト教会



■お詫び訂正■

10月号p.68の「日本における教会の統計記録」の中で1981年7月末現在の記録となっているのは3月末現在の誤りです。お詫びして訂正いたします。

浦和ツード部

付属図書館

新しい神殿の完成予想図

（上の段の左端は西ドイツとチリに建てられるもの、左から2番目はトンガ、西サモア、3番目は韓国、スウェーデン、南アフリカ、右端はフィリピンとタヒチの神殿である。下段はペルーとグアテマラに建てられるものである）

